

# 福岡県の装飾古墳

開館五周年記念特別企画

(全国の装飾古墳シリーズ三)

一九九七 熊本県立装飾古墳館



開館五周年記念特別企画

(全国の装飾古墳シリーズ三)

# 福岡県の装飾古墳

一九九七 熊本県立装飾古墳館

主

共

会

催

熊本県立装飾古墳館

肥後古代の森協議会

期

平成9年11月1日から

11月30日まで

場

熊本県立装飾古墳館企画展示室

## 開催にあたって

熊本県立装飾古墳館では、平成四年四月十五日の開館以来、肥後古代の森（風土記の丘）中核施設として、特に装飾古墳の調査研究をはじめとして県下の古代文化保護の拠点として教育普及活動を展開してきました。本館では、平成七年から八年間の継続企画展として「全国の装飾古墳シリーズ」を開催しています。本年度は「福岡県の装飾古墳」展の開催年ですが、折しも開館五周年とも重なり、記念講演会などと併せて特別企画として開催することになりました。

福岡県は本県と並ぶ装飾古墳の中心地で、両県併せて全国の装飾古墳の約半数が集中する地域です。そこに描かれている装飾文様は、熊本県との共通点も多い反面、大陸系（朝鮮半島・中国）画風の影響下に叙述的で物語性のある装飾も加わり、独特の装飾古墳は、考古学の分野のみならず、日本の美術史における草創期を飾るものとしても良く周知されているところです。

本書の刊行にあたり、装飾古墳研究の第一人者である小田富士雄・石山 熱両先生には玉稿を頂くとともに、装飾古墳との関わりのなかで、保存のために奔走し或いは志半ばにして倒れた在野の研究者のことなど様々な人の周辺を、各地域の若き研究者の方々に執筆して頂き、併せて掲載させて頂きました。今日に残る貴重な装飾古墳の背景に、こうした多くの苦難の歴史が秘められていましたことをも注目して頂ければ幸いです。

最後に、この特別企画展を開催するにあたり、御協力頂いた福岡県及び関係市町村各位に厚く御礼申しあげます。

一九九七年十一月一日

熊本県立装飾古墳館 館長 中島武治

## 目次

ブローチ	1
装飾古墳の保護の現状	2
九州・福岡県の装飾古墳分布図	4
装飾古墳学史	10
装飾文様の地域性	12
エッセイⅠ 「竹原古墳を守った人々」	14
若宮町教育委員会 小方 良臣	18
福岡県の装飾古墳一覧	20
装飾古墳参考墳一覧	20
参考遺物出品一覧	20
エッセイⅡ 「王塚古墳」の発見と保存の歴史	90
桂川町立王塚装飾古墳館 長谷川清之	94
論考	98
福岡県の装飾古墳	98
福岡県埋蔵文化財監査課長補佐 石山 燕	98
北部九州（福岡県）の装飾古墳研究二題	105
福岡大学文学部教授 小田富士雄	116
エッセイ	118
参考文献目録	119
出品目録	119

## 凡例・例言

一 この図録は一九九七年十一月一日から十一月三十日に開催する熊本県立装飾古墳館開館五周年記念特別企画「福岡県の装飾古墳」の展示図録として作成した。

二 会期中に一部展示替えを行う場合がある。

三 借用した展示資料の所蔵者及び保管者については本文中に記載せず卷末の出品目録のなかでご芳名を記すとともに、ご厚意に深く感謝申し上げる。

四 写真資料については本文中に提供先を記すとともに、快く借用について御承諾頂いた旨感謝申し上げる。

五 福岡大学文学部教授小田富士雄氏、福岡県総務部国立博物館対策室長補佐石山歎氏、若宮町教育委員会文化財係長小方良臣氏、桂川町立王塚装飾古墳館学芸員長谷川清之氏より論考及びエッセイとして玉稿を頂いた。

六 本展示の構成、本書の編集及び執筆は学芸課の助言のもと長谷部善一が担当した。

### 表紙写真の説明

久留米藩士、矢野一貞肖像画  
久留米市、篠山神社所蔵

## プロローグ

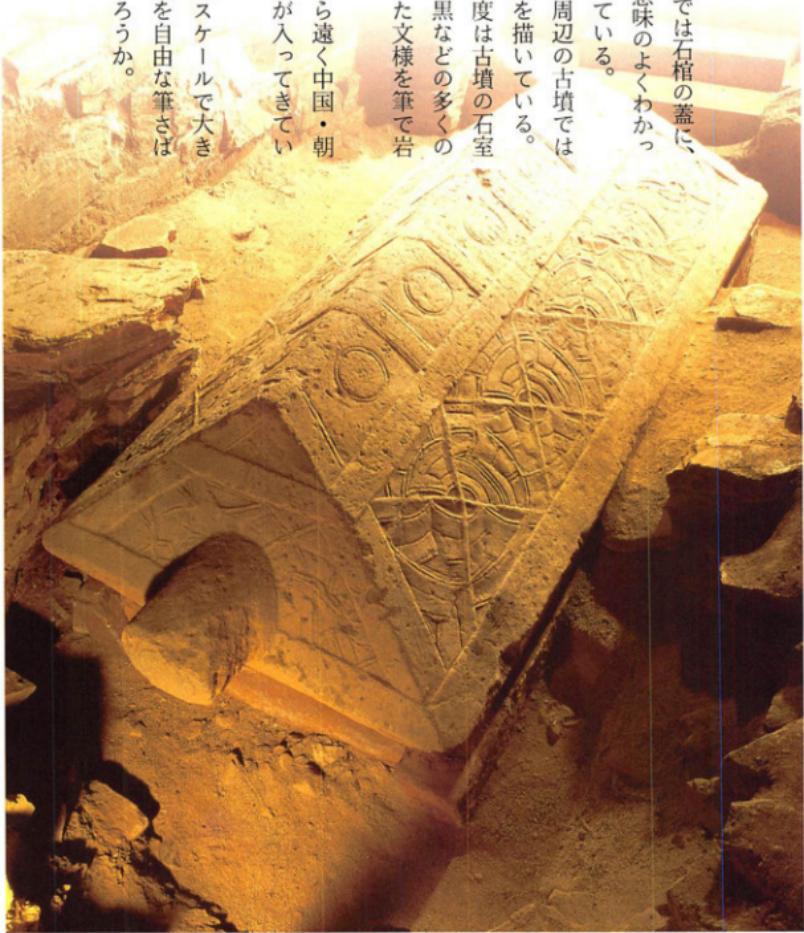
五世紀の中頃にこの古墳では石棺の蓋に、線を刻み、直弧文という、意味のよくわかつていらない幾何学模様を描いている。

もう少し時間が経つと、周辺の古墳では石棺の内側におなじ直弧文を描いている。

さらに時間が経つと、今度は古墳の石室のなかに赤・白・黄・緑・黒などの多くの色を使って今までとは違った文様を筆で岩肌に直接に描いている。

この地方にははるか前から遠く中国・朝鮮半島の多くの文物・思想が入ってきていた。

人々はこの思想を大陸的スケールで大きく膨らませ、天界での生活を自由な筆さばきで描いていたのではなかろうか。



石人山古墳 九州歴史資料館提供

## 装飾古墳の保護の現状

九州内の装飾古墳の多くは、現在、国指定・県指定・市町村指定史跡として何らかの保護措置がとられているものが多い。ほどの文化財と比べても発見されてからの保護は、その数の少なさや、一般の人々の装飾古墳への関心度などから取りやすいとされる。昭和初期の第二次世界大戦前後の時期、各地で工業・農業の生産性をあげるため多くの古墳が破壊され消滅していった。嘉穂郡稲築町の次郎太郎古墳（非装飾）など、現在では首長クラスの前方後円墳として注目を集める古墳であるが開発の名のもと破壊されて行つた。（著）

耳納山北麓に広がる浮羽郡浮羽町・吉井町・田主丸町、久留米市草野地区等でも「昔は一つの部落に一つか二つぐらいは、絵が描いてある古墳があった」と今回の装飾古墳の調査時に聞いたことがあった。この地域では現在でも小さな古墳の石室内に多くの装飾が残されておりその多くが国指定史跡として保護されている。平成六年、田主丸町・西館古墳が発見され調査がおこなわれた。この調査結果はすでに報告書にまとめられているが、現在まで破壊されずに残ってきたのは背後の耳納山麓からの土石流が覆い被さっていたためと考えられる。今後、更に多くの重要な装飾古墳が発見される可能性が十分考えられる地域のひとつである。

鞍手郡若宮町・損ヶ熊古墳の壁画は、農業政策の一環として行われている圃場整備事業実施前の調査時に発見された。石室内奥壁には、彩色技法による直線や横線・斜線等幾何学的な文様が確



整備された装飾古墳 広川町・弘化谷古墳

認められ、現在は保護のための整備を待っている状態である。

最初に挙げた、稲築町の次郎太郎古墳はあと二つの例と比べると、発見された時代が悪かったと言うしかない。この古墳は、石炭採掘の跡を埋めるための土として採上されたと聞く。

ほぼ同じ時期、嘉穂郡桂川町においても石炭採掘のため壊されかけようとした古墳があった。「玉塚古墳」である。現在は、奈良県にある高松塚古墳と並び特別国指定史跡に指定され、九州の装飾古墳の白眉と言われている古墳である。この古墳は、西村・馬氏<sup>注1</sup>の功績により、石室は、現在まで発見されたときのまま保護されている。

平成七年に嘉穂郡額田町で開発に伴う事前調査で城腰遺跡内から横穴墓が発見され調査の結果、人物像が奥壁に線刻画として確認されている。このときは、町の文化財関係者の粘り強い保存活動で保護にこぎ着けたということである。

以上あげた例は幸運にも保護されたものの例であるが、そこには装飾古墳だったから残せたというのもあるかもしれない。一般に開発に伴った調査では集落・墳墓等は調査終了とともに姿を消していくことが多い。

装飾古墳の保護といえば通常、覆屋（保護施設）に温度・湿度の管理が行き届いた施設が付設し、一年中見学ができるのか、見学が制限されるというイメージがある。しかし、そのような施設を持っているのは九州のなかでもほんの一部であり、ほとんどの古墳は彩色の剥落や線刻の風化が起こらないように、埋め戻してある。

保護措置が取られるのは良いことであるが、見学者に利用しや

すい保護施設についても検討する時期にきているのではなかろか。

装飾古墳を保護してこられたのは、その多くが行政サイドの人間ではなく、一般的の市民の声であったかもしれないのだから。

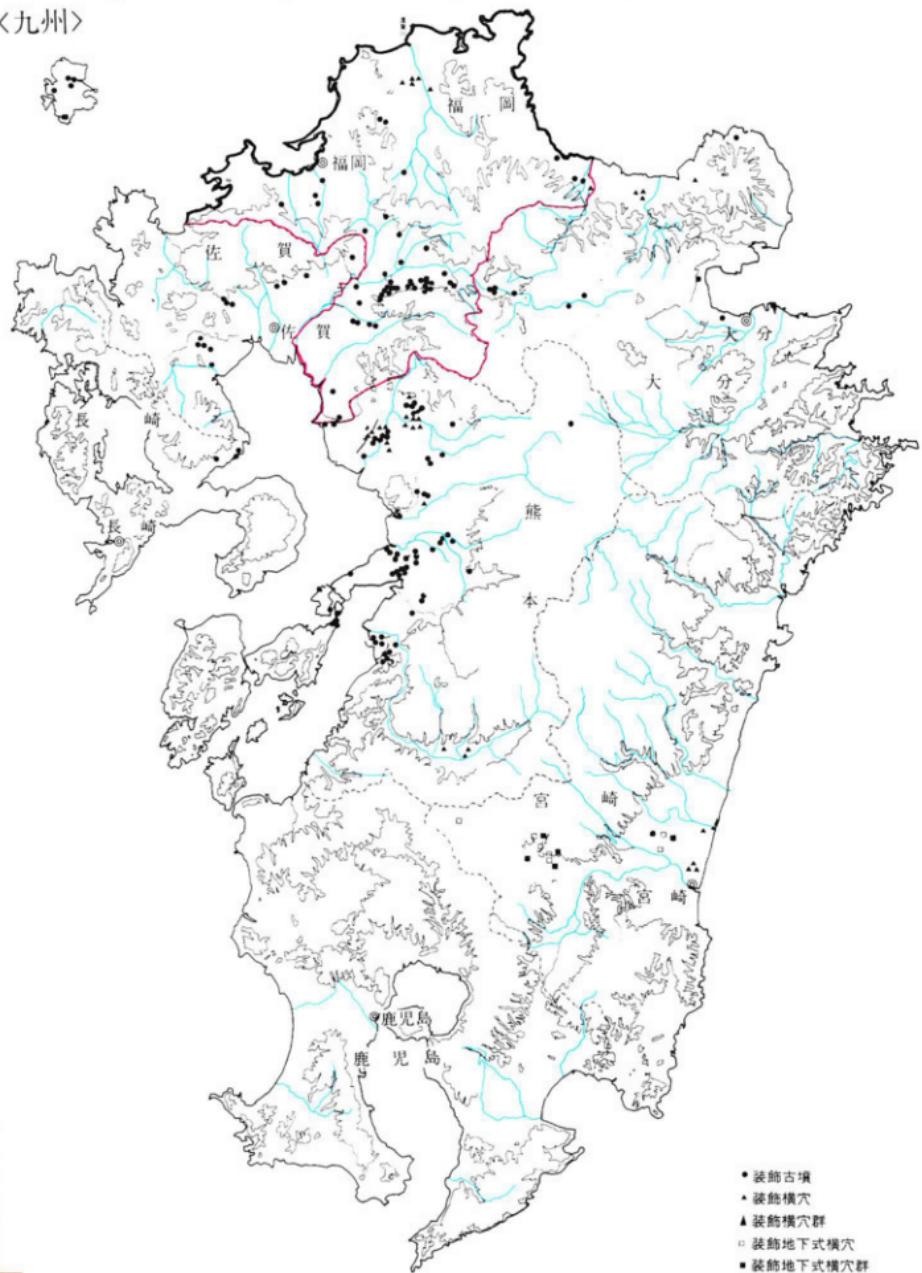
#### （注）

注1 稲築町・次郎太郎古墳は古墳が破壊された時、地元高校の先生が遺物の採集をおこなっており近年報告書が刊行されている。

注2 玉塚古墳の保存に力を入れた、西村・馬氏については本紙中のエッセイII『「玉塚古墳」の発見と保存の歴史』のなかで触れられている。



〈九州〉



九州の装飾古墳分布図

(国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』一部加筆)

# 福岡県地図

## III 周防灘沿岸

## IV 筑後川中流域

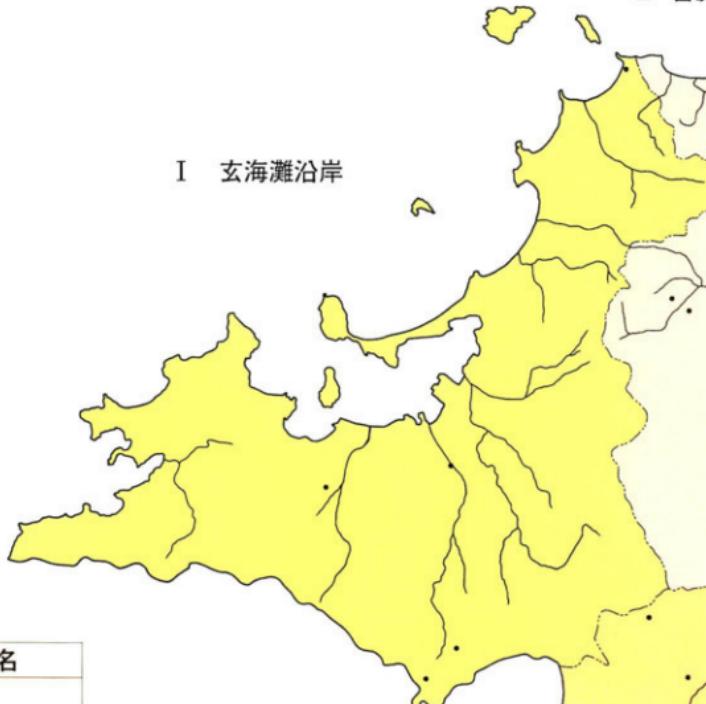
- 装飾古墳
- ▲ 装飾横穴

0 10 20km

古 墓 名	
1	浦山古墳（浦山古墳群）
2	日輪寺古墳
3	下馬場古墳（吉木古墳群）
4	鹿毛塚古墳
5	中馬場古墳
6	前堀古墳（夫婦木古墳群）
7	妻側下北古墳（夫婦木古墳群）
8	妻側下南古墳（夫婦木古墳群）
9	山ノ下古墳
10	若宮古墳
11	森塚古墳
12	上諸富古墳
13	上江下小路古墳
14	大慶寺古墳（大慶寺古墳群）
15	中庭狐塚古墳（中原・森山古墳群）
16	寺達古墳
17	益生田古墳（益生田古墳群）
18	清長橋古墳（大塚清長橋古墳群）
19	西館古墳（麦生古墳群）
20	原古墳（扇形古墳群）
21	珍敷塚古墳（扇形古墳群）
22	鳥鶴塚古墳（扇形古墳群）
23	古塚古墳（扇形古墳群）
24	紋塚古墳
25	富永古墳
26	日岡古墳（若宮古墳群）
27	重定古墳（朝田古墳群）
28	塚花塚古墳（朝田古墳群）
29	石入山古墳（八女古墳群）
30	弘化谷古墳（八女古墳群）
31	兼場古墳（八女古墳群）
32	丸山塚古墳（八女古墳群）
33	釣崎6号墳（釣崎古墳群）
34	貞永古墳



## I 玄海灘沿岸



## 古 墳 名

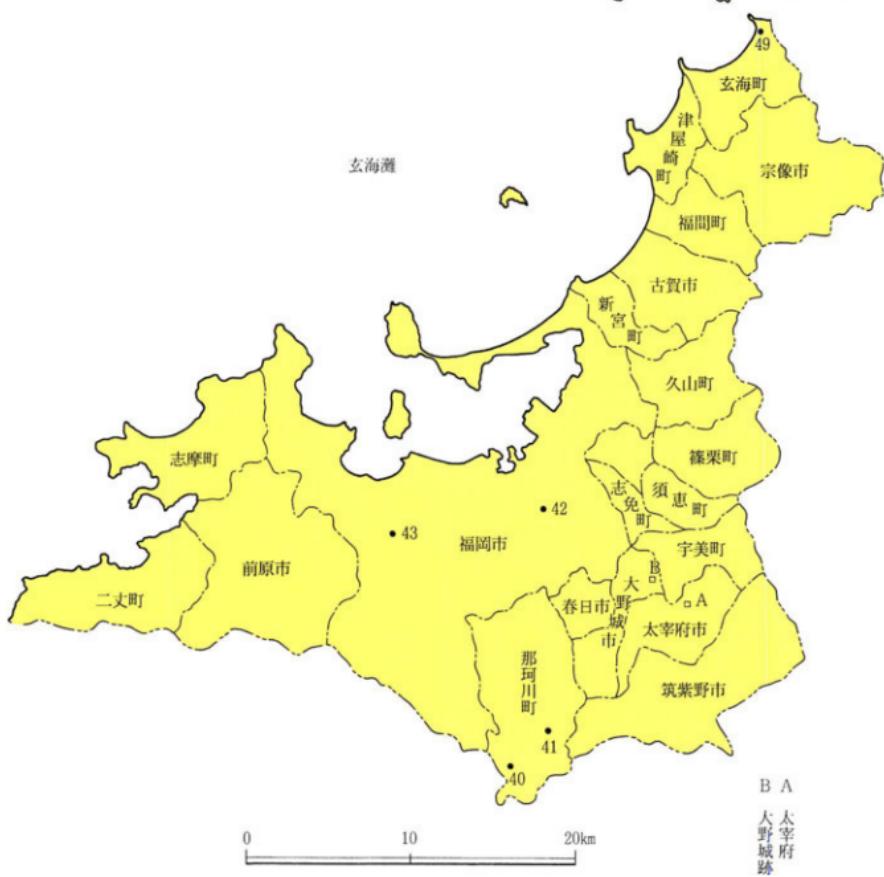
- 35 萩ノ尾古墳
- 36 狐塚古墳
- 37 宮地原古墳（宮地原古墳群）
- 38 観音塚古墳
- 39 仙道古墳
- 40 五島古石室
- 41 細櫛塚1号墳（細櫛塚古墳群）
- 42 東光寺側塚古墳
- 43 古武7号墳（古武古墳群）
- 44 檜隈塚古墳
- 45 玉瀬古墳
- 46 川島古墳（川島古墳群）
- 47 竹原古墳
- 48 指十熊古墳
- 49 桜原古墳
- 50 上手の内横穴墓群1号
- 51 潟ノ横穴墓群14号
- 52 田生羅漢山横穴墓群3a-1号
- 53 日明一本松塚古墳
- 54 相坂横穴墓14号
- 55 相坂横穴墓15号
- 56 百留横穴墓群1号
- 57 百留横穴墓群2号
- 58 百留横穴墓群3号
- 59 穴+栗山1号墳（穴+栗山古墳群）
- 60 穴+栗山3号墳（穴+栗山古墳群）
- 61 山田1号墳（山田古墳群）
- 62 黒部6号墳（黒部古墳群）
- 63 古月横穴2号横穴
- 64 古月横穴6号横穴
- 65 古月横穴9号横穴
- 66 城隈横穴墓
- 67 水町横穴墓 A13-1号
- 68 水町横穴墓 B18-1号

## V 有明海沿岸と八女地方





I



49 43 42 41 40  
五郎山古墳  
櫻原古墳  
東光寺剣塚古墳  
吉武古墳

I 玄界灘沿岸  
この地方は、朝鮮半島に  
対し、対馬を挟んで向かい  
合っている地域である。弥  
生時代には大陸の先進的な  
金属器文化と、稻作文化が  
いち早く取り入れられ、原  
始的国家体制がかたち作ら  
れた地域である。

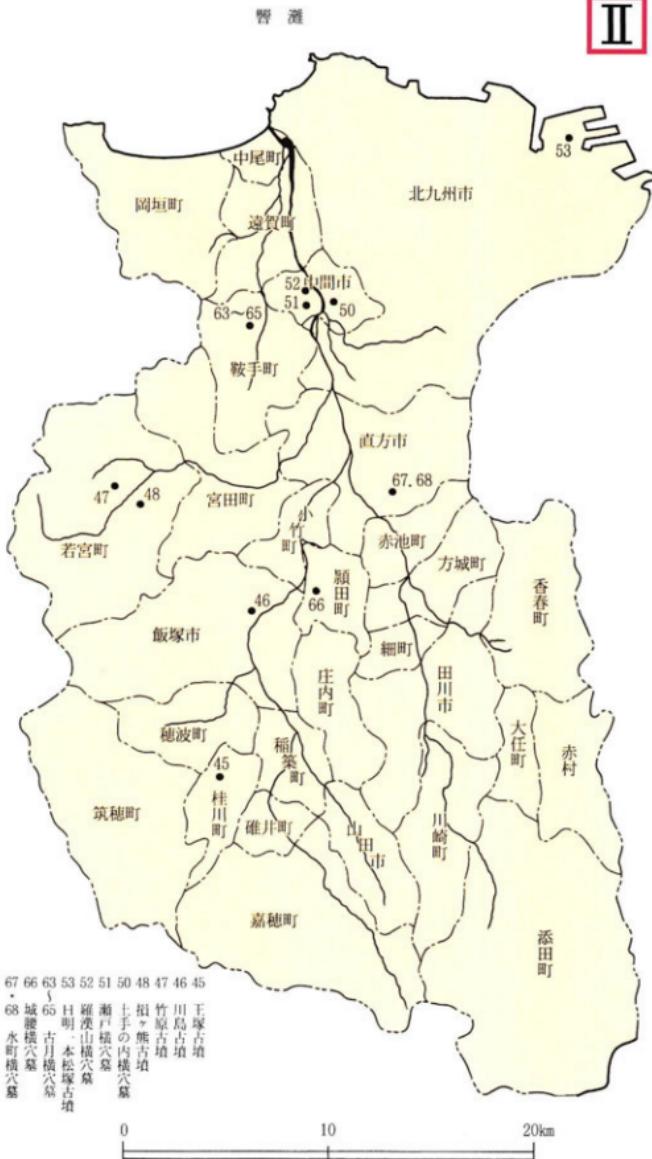


II

Ⅱ 韶灘沿岸と遠賀川流域

遠賀川下流域は細文時代の貝塚が多く見らる地域の一つである。現在の直方市付近まで、シジミ・赤貝・カキ等を主とする貝塚が作られている。

時代が新しくなり水谷町では小林行雄によつて命名された弥生時代前期の土器（遠賀川式土器）が発見された立屋敷遺跡がある。





### III

#### III 周防灘沿岸

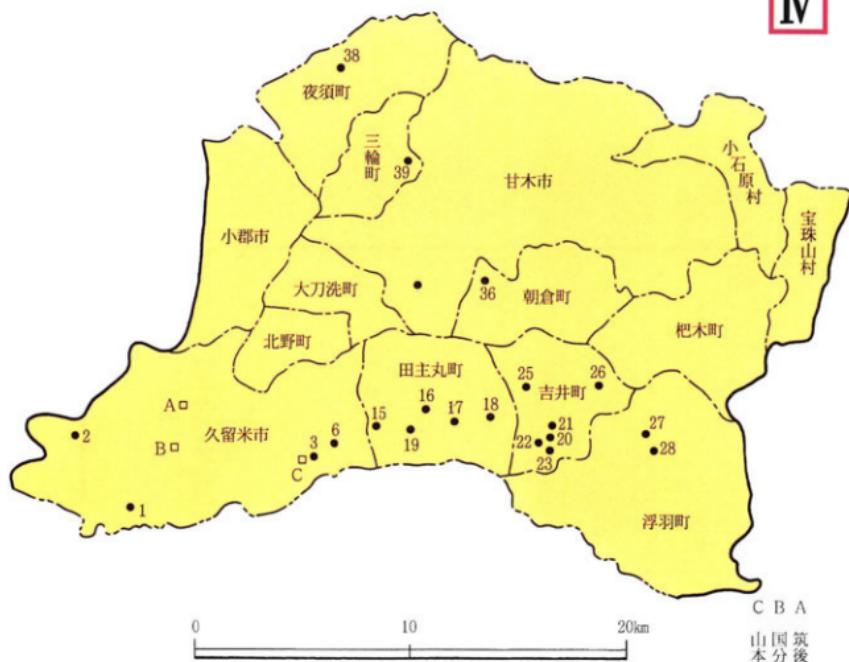
この地域では北九州市付近を中心に旧石器時代の遺跡が数多く確認されている。同じく同市では弥生時代に小倉南区の守恒遺跡から、中期後半の遺物とともに中国前漢の五銖錢が出土している。この時

期の実年代を考えるうえで重要な遺物の一つである。





IV



- |        |      |       |       |      |       |     |      |        |      |       |       |      |      |       |      |      |       |      |   |
|--------|------|-------|-------|------|-------|-----|------|--------|------|-------|-------|------|------|-------|------|------|-------|------|---|
| 39     | 38   | 36    | 28    | 27   | 26    | 25  | 23   | 22     | 21   | 20    | 19    | 18   | 17   | 16    | 15   | 6    | 3     | 2    | 1 |
| 筑紫平野古墳 | 浦山古墳 | 日輪寺古墳 | 下馬場古墳 | 西原古墳 | 清長橋古墳 | 原古墳 | 前畠古墳 | 中原孤塚古墳 | 寺徳古墳 | 益生田古墳 | 鳥羽塚古墳 | 古水古墳 | 古烟古墳 | 珍敷塚古墳 | 重定古墳 | 狐塚古墳 | 鶯谷塚古墳 | 仙道古墳 |   |

N 筑後川中流域

筑紫平野を中心に、これを取り囲む河岸段丘上から山麓にかけて多くの遺跡が確認されている。特に、弥生時代から古墳時代にかけては大規模な集落跡がある。古墳時代には、全国的に見ても最古の部類にはいる帆立貝式の前方後円墳である津古生掛古墳が発見され一躍注目されている地域である。



# V



35 34 32 31 30 29

石入山古墳  
弘化谷古墳  
垂場古墳  
丸山塚古墳  
倉水古墳  
萩ノ尾古墳

齊明天皇七年に作られたとする神籠石のなかで、久留米市「高良山神籠石」について現在知られている限り南限である女山神籠石が瀬高町に存在する。福岡県内には、このほかに穎田町・鹿毛馬神籠石と三例が確認されている。

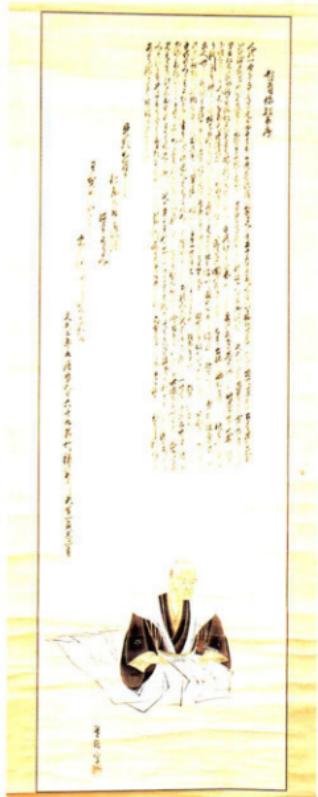
## V 有明海沿岸と八女地方

## 福岡県の装飾古墳学史

### 江戸時代

各地の古墳の多くは古くから石室入口が開き人の出入りも自由であった。なかには、時として後世の人々の住居として使用されたり、貯蔵用の倉庫として利用されてきた。

それは、横穴墓である場合は、人が住みやすいように掘削し掘り広げ、天井を高くしたりと様々な努力がおこなわれている。その後、床をきれいに掃き、中央部で火を焚き人々の生活が営まれていく。



矢野一貞肖像画（福山神社所蔵）

口の開いた古墳にとって文化財保護が叫ばれるまで受難の時間が長く続いた。このなかには、装飾古墳も多く含まれている。

今回取りあげる「福岡県」を詳しく見ると各地域ごとに多くの文化財保護活動家・研究家が存在している。

現在残されている文献のなかで記録として一番古いのは、久留米藩士（現久留米市）矢野一貞である。一貞は、寛永六年（一七九四）に三潴郡京隈字小松原で生まれ、明治十二年（一八七九）に亡くなっている。

幕末から明治期までを生きており福岡県南部・熊本県北部の古墓・石塔など旧跡を訪ね歩き、正確な観察をおこない「筑後將士軍談」のなかに残している。

浮羽郡浮羽町・重定古墳（宮田石窟）など石室の展開図及び現在では文様の観察しにくい装飾文様が正確な記述とスケッチでこの本に収録されている。一貞の残した「筑後將士軍談」の中には現在では崩落して見ることのできない熊本県山鹿市・鍋田横穴墓

第二十七号墓の入口右側の装飾文様など貴重なスケッチが多く残されている。

現在、一貞の残したこの「筑後將士軍談」は久留米市篠山神社に一貞のほかの著書と肖像画とともに保管されている。

以下、一貞の残した著書を列記する。

山上産・生竹巡覧・上宮田石窟朱象岡井窟中図

宮田石窟朱象岡考・筑後古塚遺物縮図・帰厚遺物縮図

筑後將士軍談（別名 築後諸將軍記）・詩歌草稿・漢字通考

波の浮草・筑後国郡志・壬戌風説書・要地巡覧日記

三道見聞雜記・浮羽盃・金桑慨談・漢字通考・異鳥奇骨考

蒲池家事跡調査書・筑後國上妻郡一条村立物

理髮及元服考・古葬考・高樹神社由来略記・三条十一件講録

葵西第一集占書旧記類・筑後歷世古文書・五条文書

月岡所獲古器図・陵墓圖考・陵墓圖考附錄・銅鉢の記

姫社考・諸社拾夫抄・高良祭神考・阿波國微古雜抄

五条岬家藏本書写・瓦考草按

県邑・盛德院殿伝聞密語・西海紀談・柏葉雜錄・柏葉抄錄

柏葉抄錄附錄・三事國考・三丘吉物・七種國考抜書・懷古慨言

田制貫線石称集説・畝丈略記・明善堂詩文会歌文集

矢野氏系図・筑後国駅路考

明治以後から現代へ

明治十年に來日した、エドワード・モースによつて、日本のそれまでの諸学は近代考古学への道筋がつけられ、その後、大正五年に京都大学に考古学講座が開設されると、同教室の濱田耕作・

梅原木治氏らによる熊本県下の装飾古墳の調査、その後福岡県の装飾古墳の調査をそれぞれ、「肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴」、「九州に於ける装飾ある古墳」にまとめてある。

その後、各地域ごとに地元研究者らによる調査がおこなわれており、装飾古墳調査の先駆けとして大きな功績を残している。

このようななかで、嘉穂郡桂川町・王塚古墳の発見があり、この調査報告書として梅原木治・小林行雄両氏らによる「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」（昭和十五年）、がまとめられている。

戦後、装飾古墳は五郎山古墳（筑紫野市）、竹原古墳（若宮町）、桜京古墳（玄海町）、珍敷塚古墳（吉井町）など開発の速度が早まるとともに重要な古墳の発見が相次いだ。

昭和三十五年末で、全国で登録された装飾古墳は三百六十基に達し、多くの装飾古墳は史跡として指定され、行政の保護が加えられることがとなつた。

一九七三年には民間の人々による「装飾古墳を守る会」が結成され、一九七四年には同会により、「装飾古墳白書・福岡県下における保存の現状」、一九七八年に「装飾古墳白書・熊本県下における保存の現状」が相次いで刊行された。

現在、装飾古墳は、長い年月、外気にさらされてきたが指定を受けているものについては、覆屋などの保護施設が作られているが指定を受けないものについては現在でも野ざらしの状態である。全国の装飾を持たない古墳は約三十万基確認されているがそのなかで装飾古墳は全国で約六百基確認されている。

最近では、若宮町・折ヶ原古墳、田主丸町・西館古墳などが発見されておりますます数が増えていくことが予想される。

## 装飾文様の地域性

### 同心円文・円文について

福岡県地方では、以前から同心円文・円文・三角文等幾何学的

文様の他に、人物・馬・怪獣・四神思想等、叙述的、大陸系画風が導入されており他の地域との装飾文様の違いが見られる。しかし、そのような叙述的、大陸系画風のなかにも装飾図を詳しく観察し、分解してみると在地で描かれた文様と多くの共通点が見いだされる。

大陸系装飾の一つである、吉井町・珍敷塚古墳には娘姫（ガマガエル）が描かれているが、船・人物・鳥・蕨手文などがあり、また叙述的文様とされている若宮町・竹原古墳でも、船・三角文・馬・人物が描かれ、在地系の装飾文様と重なる所も多い。

これを、15頁～16頁の表で比較・分布を見ると、各地域の装飾文様の特長を見る事ができる。この図は、最初に地域区分したI～V地域（I 玄界灘沿岸、II 豊後川流域、III 周防灘沿岸、IV 筑後川中流域、V 有明海沿岸と八女地方）区分で古墳毎に装飾文様を分解し、作成したものである。

### 直弧文について

五世紀中頃から終わりにかけ、現在の久留米市周辺で横口式家形石棺の蓋、棺内部に線刻手法により対角線に円弧を重ね合わせた文様が見られる。この文様の発生については弥生末から古墳時代初めに畿内もしくは吉備（現岡山地方）で使用され始めており、

その後、刀剣の装具や蓋、盾にも利用され、畿内を中心に全国に広まつた文様である。

### 三角文について

同心円文・円文について多く見られるのが三角文である。三角文は、甲冑あるいは盾等に横に綴じ縫い合わせてある鉄の板を表すものと考えられている。

三角文の発生について諸説あるがこの文様が一つだけ独立して描かれることはなく、連続して描かれており、一面に装飾文様として利用されており、旗として利用されてたりと、様々な形で見られており発生の意味を考えるとき一つのきっかけが見い出

ここで、一番に目を引くのは、IV・V地域における同心円文・円文を描く地域である。なかには、消滅した古墳もあるが本来は同心円文もしくは円文が描かれていたと考えられる。

同心円文・円文の発生については青銅鏡を模したことから始まったといわれている。鏡を副葬するという、畿内の風習が伝播したと考えられ、また葬送時に鏡を紐で吊す装飾が見られる熊本県不知火地方の風習の影響もあるのかもしれない。

円文は装飾が盛んに描かれるようになると、本来の鏡としての意味からはずれ太陽を表したり別の意味をもつものとして描かれていることもある。鏡が本来辟邪のシンボルとして描がされた者が同心円文・円文とすればこの文様が描かれた地域は同じ支配者による葬送権の統一がなされていた可能性が考えられる。

この地域は、筑後川中流域から久留米平野を抜け八女丘陵にまで達する広い地域である。ちなみに、この地域は磐井の乱までは、筑紫君磐井の勢力の中枢地でありその後、IV地域は的杵勢力範囲とし、地方豪族の拠点とされた地域である。

### 三脚文について

同心円文・円文について多く見られるのが三脚文である。三脚文は、甲冑あるいは盾等に横に綴じ縫い合わせてある鉄の板を表すものと考えられている。

三脚文の発生について諸説あるがこの文様が一つだけ独立して描かれることはなく、連続して描かれており、一面に装飾文様として利用されており、旗として利用されてたりと、様々な形で見られており発生の意味を考えるとき一つのきっかけが見い出





地域区分	古 墓 名	所 在 地	墳丘形態	埋葬施設	施 文 方 法
I	五郎山古墳	筑紫野市	円墳	複室横穴式	彩色(赤・黒・緑)
I	殿塚塚1号墳(殿塚塚古墳群)	筑紫野市	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
I	東光寺創建古墳	福岡市	前方後円墳	複穴式石室	縫刺
I	古武古2号墳(古武古墳群)	福岡市	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
I	殿塚塚古墳	那珂川町	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
I	殿塚塚古墳	玄海町	前方後円墳	複穴式石室	彩色(赤・緑)
II	牛塚古墳	糸井町	前方後円墳	複室横穴式	彩色(赤・白・黒・緑・黄)
II	川島古墳(川島古墳群)	飯塚市	円墳	複穴式石室	彩色(赤・黒)
II	竹原古墳	若宮町	円墳	複穴式石室	彩色(赤・黒)
II	船山古墳	若宮町	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
II	丁子の内塙穴墓群1号	中間市		複穴墓	縫刺
II	高瀬1号墳14号	中間市		複穴墓	縫刺彩色(赤)
II	田生難瀬山横穴墓群3号-1号	中間市		複穴墓	縫刺
II	前坂横穴墓1号	此九州市		複穴墓	縫刺
II	前坂横穴墓1号5号	此九州市		複穴墓	縫刺
II	矢野横穴墓群 A13-1号	直方市		複穴墓	縫刺
II	矢野横穴墓群 B18-1号	直方市		複穴墓	縫刺
II	吉月横穴2号横穴	鞍手町		複穴墓	縫刺
II	吉月横穴6号横穴	鞍手町		複穴墓	縫刺
II	吉月横穴8号横穴	鞍手町		複穴墓	縫刺彩色(赤)
II	越後横穴墓	鞍手町		複穴墓	縫刺
III	日明一本松古墳	此九州市	円墳	複室横穴式	彩色(赤)
III	百留塚穴墓群1号	大平村		複穴墓	彩色(黄・赤)
III	百留塚穴墓群2号	大平村		複穴墓	彩色(黄・赤)
III	百留塚穴墓群3号	大平村		複穴墓	彩色(黄・赤)
III	穴ノ堀山1号墳(穴ノ堀山古墳群)	大平村	円墳	複穴式石室	縫刺
III	穴ノ堀山2号墳(穴ノ堀山古墳群)	大平村	円墳	複室横穴式	縫刺
III	山由1号墳	新古富村	円墳	複穴式石室	縫刺
III	黒部北1号墳(黒部古墳群)	豊前市	円墳	複穴式石室	縫刺
IV	山古墳(山古墳群)	久留米市	前方後円墳	複穴式石室	縫刺(赤で彩色)
IV	日輪寺古墳	久留米市	前方後円墳	複穴式石室	浮遊的縫刺(赤で彩色)
IV	下馬塚古墳(下馬古墳群)	久留米市	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
IV	鹿毛塚古墳	久留米市	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
IV	中馬塚古墳	久留米市	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
IV	前畠古墳	久留米市	円墳	複室横穴式	彩色(赤)
IV	粟原下北古墳	久留米市	円墳	複室横穴式	彩色(赤・緑・白)
IV	粟原下南古墳	久留米市	円墳	複室横穴式	彩色(赤)
IV	山下古墳	久留米市	前方後円墳	複穴式石室	彩色(赤)
IV	若宮古墳	久留米市	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
IV	森谷古墳	久留米市	円墳	複穴式石室	彩色(赤・青)
IV	諸富古墳	久留米市	円墳	複穴式石室	不明
IV	江下下古墳	久留米市	円墳	複穴式石室	不明
IV	大魔壹古墳(大魔壹古墳群)	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
IV	中留置保古墳(中留・森古墳群)	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
IV	等後古墳	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・黄・青)
IV	益生田古墳(益生田古墳群)	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青・白)
IV	酒井長古墳(大原酒井長古墳群)	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
IV	西鶴古墳(安生古墳群)	田主丸町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・緑)
V	原古墳(原形古墳群)	吉井町	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
V	珍敷塚古墳(星形古墳群)	吉井町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
V	珍敷塚古墳(星形古墳群)	吉井町	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
V	古御古墳(星形古墳群)	吉井町	円墳	複室横穴式	彩色(赤)
V	絆塚古墳	吉井町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
V	草永古墳	吉井町	円墳	複穴式石室	縫刺(赤・青・白)
V	日向古墳(若宮古墳群)	吉井町	前方後円墳	複穴式石室	彩色(赤・青・黄)
V	重定古墳(朝古田古墳群)	浮羽町	前方後円墳	複室横穴式	彩色(赤・緑)
V	浮羽塚古墳(朝古田古墳群)	浮羽町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
V	荒塚古墳	朝倉町	円墳	複室横穴式	縫刺
V	宮地嶽古墳(宮地嶽古墳群)	朝倉町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・緑)
V	鏡音塚古墳(祇山古墳群)	夜須町	円墳	複室横穴式	彩色(赤・青)
V	延道古墳	三輪町	円墳	複穴式石室	彩色(赤・緑)
V	若人山古墳(八女古墳群)	志戸町	前方後円墳	複室横穴式	浮遊的縫刺
V	弘化谷古墳(八女古墳群)	志戸町	円墳	複穴式石室	彩色(赤・緑)
V	東場古墳(八女古墳群)	八女市	前方後円墳	複室横穴式	彩色(赤・青・黄)
V	丸山塚古墳(八女古墳群)	八女市	円墳	複室横穴式	彩色(赤・緑・黄)
V	對崎6号墳(對崎古墳群)	八女市	円墳	複穴式石室	彩色(赤)
V	貞永古墳	大牟田市	円墳	複穴式石室	縫刺
V	轟ノ城古墳	大牟田市	円墳	複室横穴式	彩色(赤)

されるのではなかろうか。

#### その他の幾何学文様について

直弧文・同心円文・円文・三角文には多くの類例があり、文様の持つ本来の意味についても推測できる材料がある。しかし、次にあげる文様については、何を表現しているのか分からぬ特色ある文様である。蕨手文・双脚輪状文・鍵手文である。

蕨手文はIV地域でもわずか3例確認されているだけである。文様の本来の意味は分かっていない。

双脚輪状文は福岡県地域で2例（玉塚古墳・弘化谷古墳）、熊本県地域で1例（釜尾古墳・横山古墳）の計4例である。この双脚輪状文が何を示しているのかは分からぬが、同心円文から発展したものと考えられる。この双脚輪状文が描かれている古墳にはいわゆる石屋形（平入り石棺）が築かれている。この構造については若干の作られる段階での手法の違いが福岡・熊本の例で見られる。この構造上の関係と装飾文様の関係については、今後の課題の一つといえよう。

鍵手文は現在知られている限りでIV・V地域のみで線刻・彩色とも二例ずつである。

#### 人物・馬・鳥・船・木の葉・武器・武具類について

叙述的文様として人物・馬・鳥・船・木の葉・武器・武具類がある。この文様はI～V地域まで全般にわたり彩色、線刻とともに見ることができる。

このなかで、木の葉だけはIIIの地域のそれも狹い地域でしか見

ることができない。穴ヶ葉山一号・三号、山田一号墳において見ることができる。葉の葉脈まで細かい描写が施され、特に穴ヶ葉山一号墳では、樹木のような文様まで確認されている。

人物像は、竹原古墳奥壁に描かれている全身像、城腰横穴墓に描かれている上半身像、など表現される部位に違いが見られるが、いろんな動きが表現されており、当時の服飾の一端が偲ばれる。

武器・武具の分布についてはどうだろうか。武器・武具の代表的なものとして玉塚古墳、重定古墳等があげられる。おもに彩色により表現され、刀・矢・甲冑（胴部）等が見られる。これらは、幾何学文様のなかで示した、邪魔・辟邪の意味を持つものと考えられる。武器・武具を描くことによって侵入しようとするあらゆるものに威嚇する意味で描かれたのではないか。熊本県地方では、横穴墓人口に浮彫で、武器・武具が施され、見る人まで威嚇するかのようなものもある。

装飾文様は、ここで概観したが、地域・時期により大きな違いがあるが大陸系の思想をもとにした叙述的文様と、従来描いてきた幾何学的文様、形象的文様などどちらが盛行するともなく入り交じったたちで、地域の枠に縛られないながらも独創的な文様が描かれている。

# 「竹原古墳を守った人々」

若宮町教育委員会 小方良臣

貴重な文化財や史跡を体を張って守り通した人は多くいる。桂川町の王塚古墳に西村・馬氏がいるように、若宮でもそれぞの分野で竹原古墳を愛し、守りとうした人たちがいる。特に、若くして逝った九州考古学会々員清賀義人氏は忘れてはならないだろう。

義人氏は、父義男氏とともに若宮町に在住の考古学徒である。義男氏は、印刷業のかたわら遠賀川流域の考古学資料や若宮町内の古文書などの史料を収集研究された方で、特に立屋敷遺跡や立岩遺跡の貴重な資料が収集されている。氏のエピソードは杉原莊介著「遠賀川」に「立屋敷のみでも八十何回といった風で、出水のある毎に、幾里かの峠路を自転車で行つて、濁流の遠賀川にとび込み、腰に桶をつけ（桶を浮かし）潜水して、底の洗われた河床で土器を採取したものだそうだ。」とある。

竹原古墳は当時の「発見届」によると一九五五（昭和三十）年の秋、諏訪神社秋祭に供される相撲の土俵の上を採取した折りに、古墳の石が露出したとある。どうも以前に盗掘を受けた様子があるので、翌年（一九五六）の三月十八日に有志により石室内部に入り調査がされた。昼頃に、奥壁に達し壁画を発見、皆その雄渾な龍や駒に驚嘆したという。その時の中心となつたのが義人氏である。

竹原古墳の本格的な調査は四月二十六日から実施されている。発掘調査担当は当時の福岡県文化財調査員の森貞次郎先生で、義人氏が助手として参加している。ほかに福丸中学校（現若宮中学校）教諭荒牧正義氏、福丸高等学校（現西鞍手高等学校）教諭富永守氏、厚真担当の古賀学氏の三氏と福丸中学校の郷上クラブが手伝っている。埋土の除去から石室の実測、壁画の模写などが行われ、新たに前室の玄武と朱雀が発見された。

この年は、山鹿市弁慶ヶ穴古墳、中間市の瀬戸横穴墓（消滅）等の装飾古墳が相次いで発見された年でもある。

調査後、京都大学考古学研究室をはじめ研究者の竹原古墳への見学が増えはじめた。これには若宮町公民館主事安永哲夫氏や義人氏が献身的に対応している。さらに、哲夫氏は県や国への書類の作成、保護に向けて指導をいろいろな方より受け、なによりも保存室の建設が急務と、県に補助金の申請を提出している。これを受け、一九五八（昭和十三）年三月に二十万円の経費で煉瓦造り保存室が完成した。この施設は石室に光を入れない構造、壁画前に金網を張り人の出入りを規制したことなど、保存上大きな効果をあげた。

義人氏は、戦前の兵役の折り、体を病んでいた。調査後の一九五六年七月に病床に伏し、一時危篤の状態ともなつた。彼にとつて保存室の建設は一安心だつたようだが、その後病は悪化するに至る。一九五八年七月、東京芸大の日下八光氏によって壁画の模写が開始される。模写の完成を記念して九月三日に「竹原古墳壁画完成展覧及び講演会」が若宮小学校講堂で開催された。約千人の聴衆にあふれ、人々は壁画の模写のすばらしさと、日下氏の話

に堪能したという。ただ、この会場に義人氏の姿はなかつたと、回想者は語る。

義人氏は「父は資料はたくさん収集したが研究まで至らなかつた。自分はその資料を基に再度遺跡を調査し、研究したい」というのが夢であったという。その志半ばで講演会の一ヶ月後の十月八日、竹原古墳に夢を駆せながら三十九歳の生涯を閉じたのである。

義人氏の叔父清賀俊吉氏は甥の果たせなかつた夢を追いかける

ように、竹原古墳の保存や啓発に奔走した。一九六四（昭和三十九）年以来、亡くなる一九八一（昭和五十六）年までの長い間、赤一

色で縦横斜めの線が描かれた損ヶ熊古墳が発見された。



発掘調査に携わった人

前列左 森貞次郎先生、中 荒牧正義氏、右 清賀義人氏  
後列左 富永守氏、右 古賀学氏

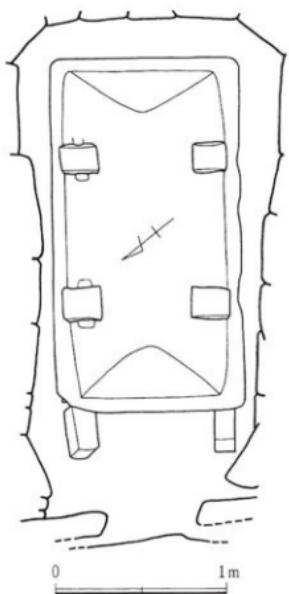
# 福岡県の装飾古墳一覧



裝飾古墳一覽目次

1 浦山古墳

(浦山古墳群) 久留米市上津野町1386  
国指定史跡



立地  
墳丘  
主体部  
装飾  
遺物  
築造年代  
備考

施文方法  
及び種類  
図文の場所

線刻後、赤で彩色 棚身内面の奥壁と側壁の三石に直弧文、同心円文 前壁の内外面及び門石に「縦手文」を線刻。全面に赤色顔料を塗布

須恵器、金環、勾玉、甲冑破片があったが現在不明  
五世紀後半

複室横穴式石室（西北方向に開口）  
前方後円墳 全長六十m

組合式構口式家形石棺



浦山古墳 石棺内部の線刻壁画 九州歴史資料館提供

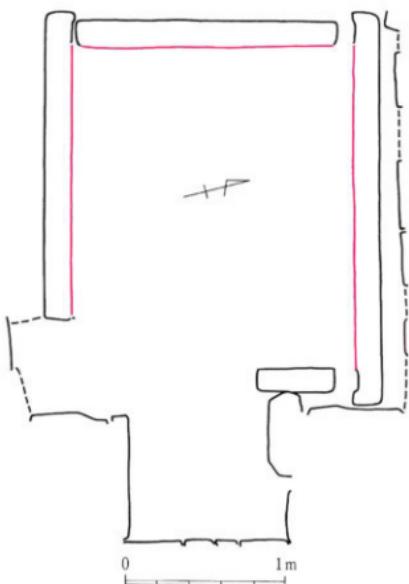


2

日輪寺古墳  
ニチリンジ久留米市京町-1  
(日輪寺境内)

国指定史跡

279-1



立地 独立丘陵上  
墳丘 前方後円墳  
主体部 全長五十m  
装飾 横穴式石室

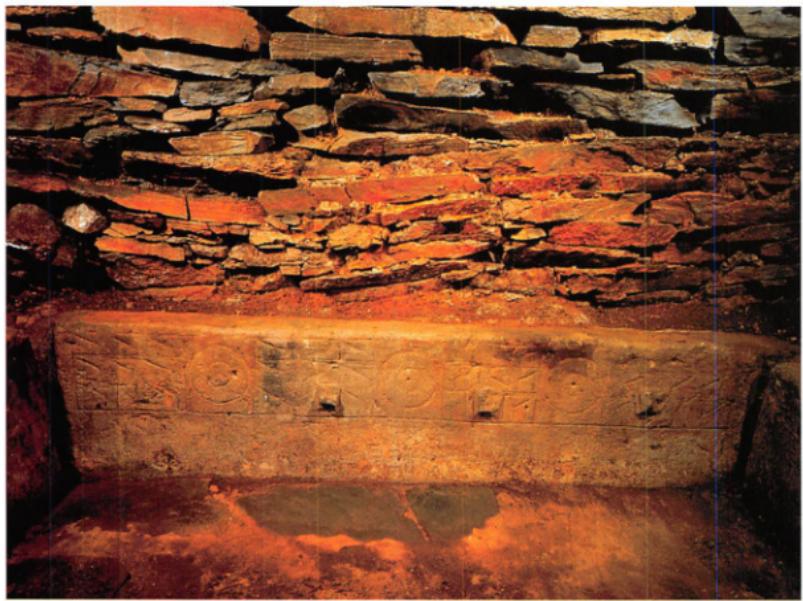
石障（奥壁障上部）  
國文の場所

施文方法 及び種類  
浮彫的線刻・同心円文、直弧文、键字文

遺物 四眼鏡、耳環、玉類（日輪寺所蔵）、石枕（東京国立博物館）

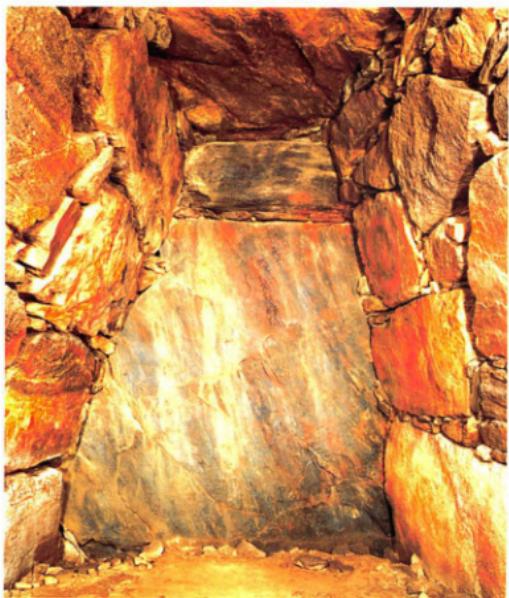
築造年代 五世紀末

備考



日輪寺古墳 石障の線刻壁画

九州歴史資料館提供



下馬場古墳 後室袖石及び奥壁の壁画 久留米市教育委員会提供

シモババ  
下馬場古墳（吉木古墳群）久留米市草野町大字吉木2263  
国指定史跡  
立地  
埴丘  
主体部  
装飾  
圓形埴丘上、標高約四十五m  
円墳 直径約三十九m、高さ約五m  
複室構穴式石室（西南西に開口）  
國文の場所 後室（奥壁、左壁、右壁）、前室（左壁、右壁、奥壁、左、通路）  
施文方法 及び種類 彩色（赤・青）、同心圓文、三角文、盾・船。  
遺物 袋掛けの女子人物埴輪、円筒埴輪があつたが現在不明  
築造年代 六世紀後半  
備考

## 6 前畠古墳

(夫婦木古墳群) 久留米市草野町草野字前畠504 県指定史跡

埴丘

円墳 直径約二十m

主体部

復室横穴式石室

前室（奥壁左右、天井）、後室（左壁、奥壁）

施文方法  
及び種類

須恵器・馬具・武具・装飾品

（九州大学玉泉館所蔵）

遺物

七世紀初頭

築造年代

備考

（旧名称）夫婦木一号墳・宮崎郡内古墳

## 7 薬師下北古墳

(夫婦木古墳群) 久留米市草野町大字草野字薬師下613-1 県指定史跡

埴丘

円墳

主体部

復室横穴式石室

前室（奥壁左右、天井）、後室（左壁、奥壁）

施文方法  
及び種類

須恵器・馬具・武具・装飾品

（九州大学玉泉館所蔵）

遺物

七世紀初頭

築造年代

備考

（旧名称）夫婦木二号墳・宮崎郡内古墳

## 8 薬師下南古墳

(夫婦木古墳群) 久留米市草野町大字草野字薬師下620-2 県指定史跡

埴丘

円墳

主体部

復室横穴式石室

前室（奥壁、左右壁）、後室（右通路面）

施文方法  
及び種類

須恵器・馬具・武具・装飾品

（九州大学玉泉館所蔵）

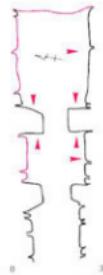
遺物

七世紀初頭

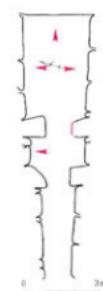
築造年代

備考

（旧名称）夫婦木三号墳



7 薬師下北古墳



8 薬師下南古墳

## 10 若宮古墳

久留米市草野町大字吉木字若宮

## 13 上江下小路古墳

久留米市草野町大字吉木字上江下小路

墳丘	円墳
主体部	不明
装飾	不明
図文の場所	不明
施文方法	不明
及び種類	彩色(赤)

遺物	不明
築造年代	不明
備考	消滅
施文方法	不明
及び種類	不明

## 11 森塚古墳

久留米市草野町大字吉木字下上江下

## 14 大慶寺古墳

(大慶寺古墳群) 浮羽郡田主丸町大字地徳字大慶寺

墳丘	円墳
主体部	不明
装飾	不明
図文の場所	不明
施文方法	不明
及び種類	彩色(赤・青)

遺物	須恵器(九州大学玉泉館)
築造年代	六世紀後半
備考	消滅
施文方法	不明
及び種類	同心円文・亀甲文?・斜十字文・鞠・三角連続文

墳丘	円墳
主体部	複室横穴式石室
装飾	後室・前室・羨道
図文の場所	不明
施文方法	不明
及び種類	彩色(赤・青)

## 12 上諸富古墳

久留米市草野町大字吉木字上諸富

## 15 中原狐塚古墳

(中原・森山古墳群) 浮羽郡田主丸町大字地徳字中原

墳丘	円墳
主体部	不明
装飾	不明
図文の場所	壁面
施文方法	不明
及び種類	不明

墳丘	円墳
主体部	不明
装飾	不明
図文の場所	壁面
施文方法	不明
及び種類	不明

墳丘	円墳
主体部	不明
装飾	不明
図文の場所	壁面
施文方法	不明
及び種類	不明

16 寺德古墳 ジトクコウツ

浮羽郡田主丸町大字益生田字寺徳 国指定史跡

墳丘	円墳 直径約二十九m、高さ約三m（西に開口）
主体部	複室横穴式石室
装飾	菱形
図文の場所	後室（左壁・袖石・右壁）・前室（奥壁、左右両壁）
施文方法	彩色（赤・黄・青） 同心円文・円文・三角文
及び種類	須恵器・装飾品・馬具
遺物	不明
築造年代	六世紀後半
備考	後室（左壁・袖石・右壁）・前室（奥壁、左右両壁）



寺徳古墳 提瓶

17 益生田古墳 マスオタコウツ

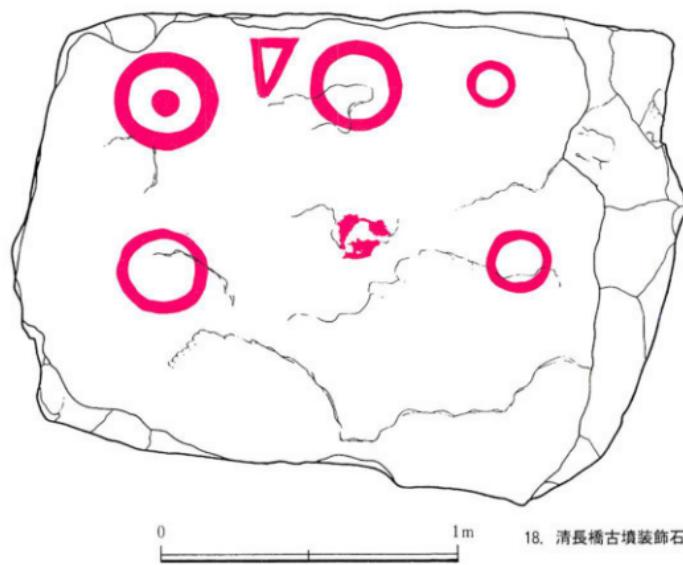
浮羽郡田主丸町大字益生田字麦生

墳丘	円墳 横穴式石室
主体部	奥壁・右袖石
装飾	不明
図文の場所	奥壁・右袖石
施文方法	彩色（赤・青・白） 同心円文・円文
及び種類	不明
遺物	不明
築造年代	不明
備考	在は消滅

セイショウタコウツ	清長橋古墳 (大塚清長橋古墳群) 浮羽郡田主丸町大字石垣字大塚清長橋
墳丘	円墳
主体部	複室横穴式石室
装飾	不明
図文の場所	不明
施文方法	彩色（赤・青） 同心円文・円文・馬
及び種類	不明
遺物	不明
築造年代	不明 (装飾石材を公民館に保管)
備考	在は消滅

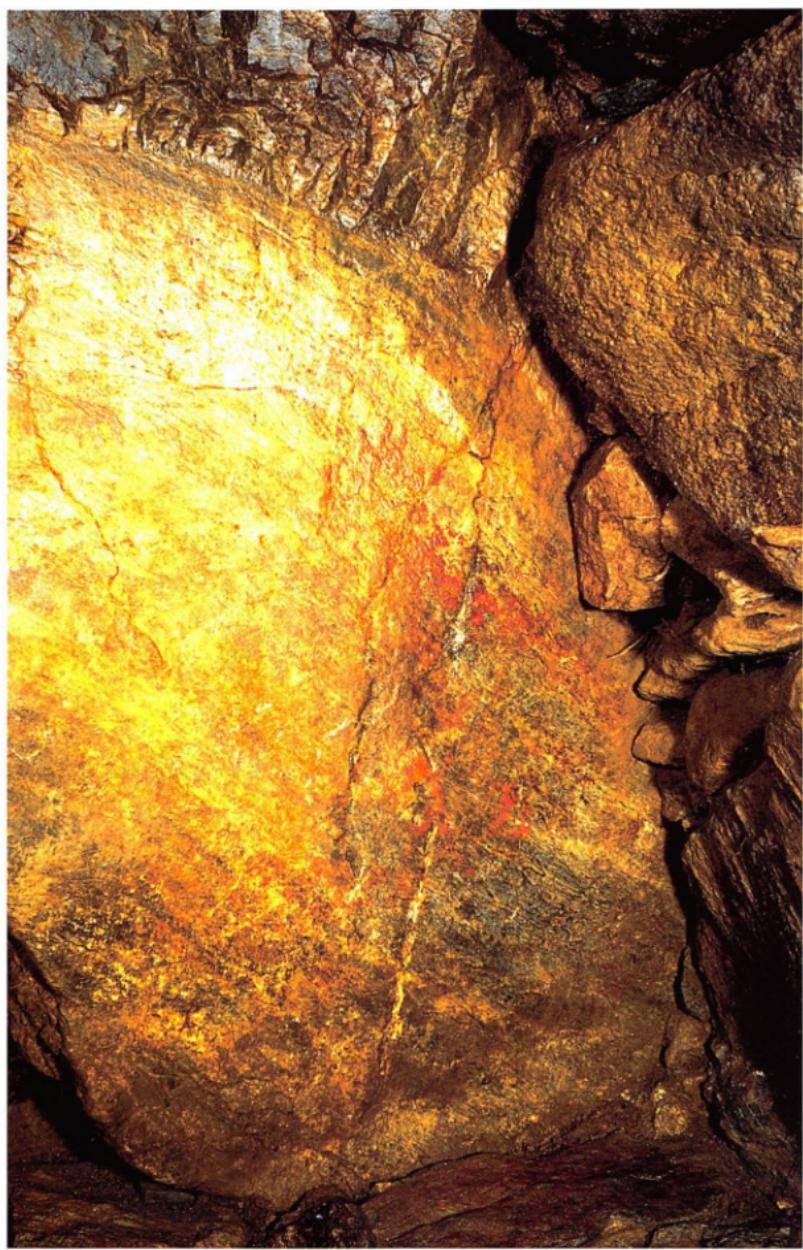


寺德古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



18. 清長橋古墳装飾石材





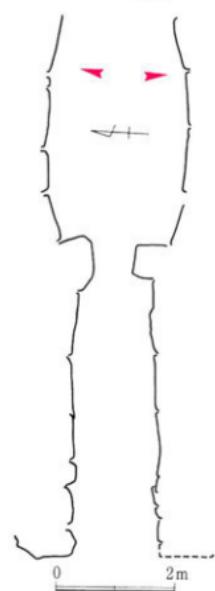
西館古墳 右袖石の壁画 田主丸町教育委員会提供



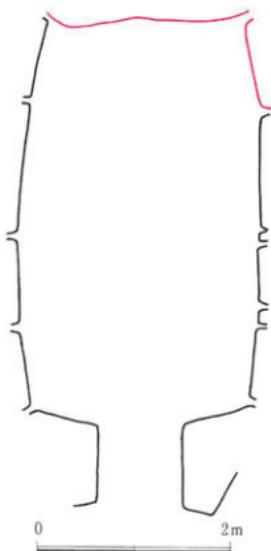
西館古墳 後室奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



20 原古墳<sup>ハル</sup>  
 (屋形古墳群) 浮羽郡吉井町大字富永字原  
 墳丘 円墳  
 主体部 横穴式石室  
 装飾 玄門・奥壁(奥壁腰石)  
 図文の場所 及び種類 施工方法  
 彩色(赤) 不明  
 遺物 同心円文・円文・人物・船  
 築造年代 六世紀後半  
 備考



21 珍敷塚古墳<sup>メタラシヅカ</sup>  
 (屋形古墳群) 浮羽郡吉井町大字富永字原 国指定史跡  
 立地 丘陵上  
 墳丘 不明  
 主体部 横穴式石室(奥壁と右側壁のみ現存)  
 装飾 奥壁・右側壁  
 図文の場所 及び種類 施工方法  
 彩色(赤・青) 不明  
 遺物 円文・蕨手文・双・人物・船・鳥・蜘蛛  
 築造年代 六世紀後半  
 備考 墳丘は消滅





珍敷塚古墳 装飾石材の壁画 九州歴史資料館提供



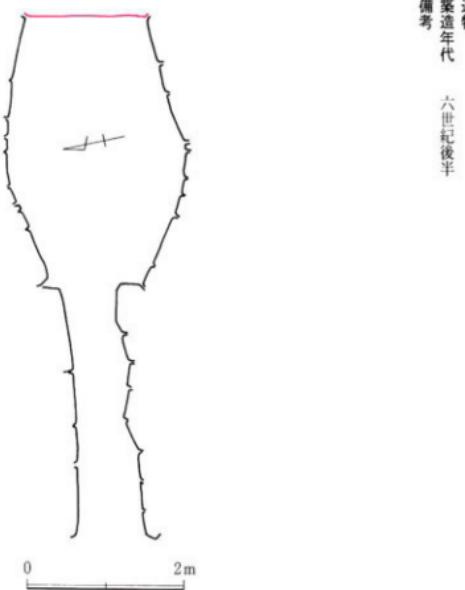
日下八光氏模写絵 国立歴史民俗博物館提供



22

## 鳥船塚古墳

(扇形古墳群) 浮羽郡吉井町大字富永字古畑 国指定史跡 トリフネヅカ



古畑古墳 墳丘の現状

23

## 古畑古墳

(扇形古墳群) 浮羽郡吉井町大字富永字古畑 县指定史跡 フルハタ

立地 丘陵上
墳丘 円墳直径約一十 m、高さ三 m
主体部 複室横穴式石室(南西に開口)
装飾 彩色(赤) 同心円文・人物・馬・大月
施文方法 及び種類
遺物 後室奥壁
築造年代 六世紀後半
備考



鳥船塚古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



古細古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



古畠古墳出土 人物埴輪頭部



古畠古墳出土 円筒埴輪



24

## 紋塚古墳

モンヅカ

浮羽郡吉井町大字富水字西屋形地区内

26

## 日岡古墳

ヒノオカ

(若宮古墳群) 浮羽郡吉井町大字若宮字高林

国指定史跡

墳丘	円墳
主体部	複室横穴式石室
装飾	図文の場所
施文方法	彩色(赤・青) 同心円文
及び種類	遺物

備考  
築造年代  
消滅

25 富永古墳

トミナガ

浮羽郡吉井町大字富水字東内畑

墳丘	円墳
主体部	横穴式石室
装飾	梯障石に装飾
施文方法	彩色(赤・青)
及び種類	同心円文

備考  
遺物  
須恵器・装飾品等多數出土しているが現在は不明  
不明  
石室は消滅しているが墳丘は現存(旧名称 狐塚古墳)

富永古墳 墳丘の現状



日岡古墳 墳丘の現状



立地	沖積台地上
主体部	前方後円墳
装飾	周壁ほぼ全面に装飾
施文方法	彩色(赤・緑・青)
及び種類	同心円文・円文・三角連続文・藤手文・釦・魚大刀・馬

備考  
築造年代  
六世紀前半

石標有り

遺物  
須恵器・装飾品等多數出土しているが現在は不明  
円筒埴輪・朝顔形V式埴輪(吉井町歴史資料館所蔵)、円筒埴輪(九州大学玉泉館)



日岡古墳 後室奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



日下八光氏模写絵 国立歴史民俗博物館提供



27

## 重定古墳

(朝田古墳群) 浮羽郡浮羽町大字朝田字重定

国指定史跡

28

## 塚花塚古墳

(朝田古墳群) 浮羽郡浮羽町大字朝田字塚花

国指定史跡

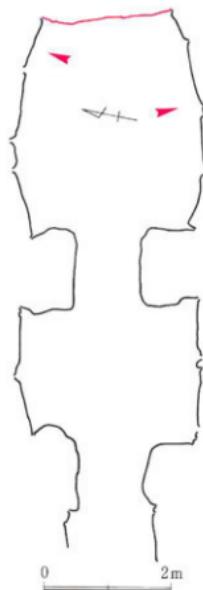
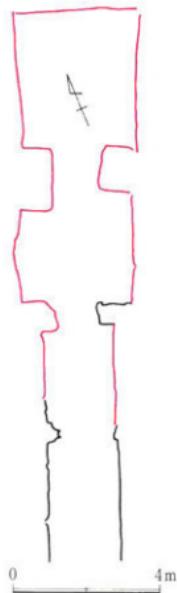
シゲサダ  
主体部  
墳丘  
前方後円墳  
全長五十m (現況)、推定七十m

複室構穴式石室  
後室 (腰石・左右側壁)・前室 (左壁)・漆導袖石左側

施文の場所  
及び種類  
彩色 (赤・青)  
同心円文・円文・藤手文・双・柄  
不明

遺物  
六世紀後半  
築造年代  
奥壁に石棚を持つ

備考





重定古墳 墓丘の現状



塚花塚古墳 墓丘の現状

29	石人山古墳	(セキジンサン)
施文方法	浮彫(直張文・同心円文)	
及び種類		
遺物	器財埴輪・円筒埴輪IV式・須恵器・器台・壺・(TK73～TK216)	
築造年代	5世紀中葉	
備考	前方後と後円部の境に武装石人が立つ	
図文の場所	棺蓋表面と横口部	
丘陵上	標高約五十m	
立地		
墳丘	前方後円墳	
主体部	全長一七〇m	
装飾	横穴式石室(妻入横口式家形石棺)	



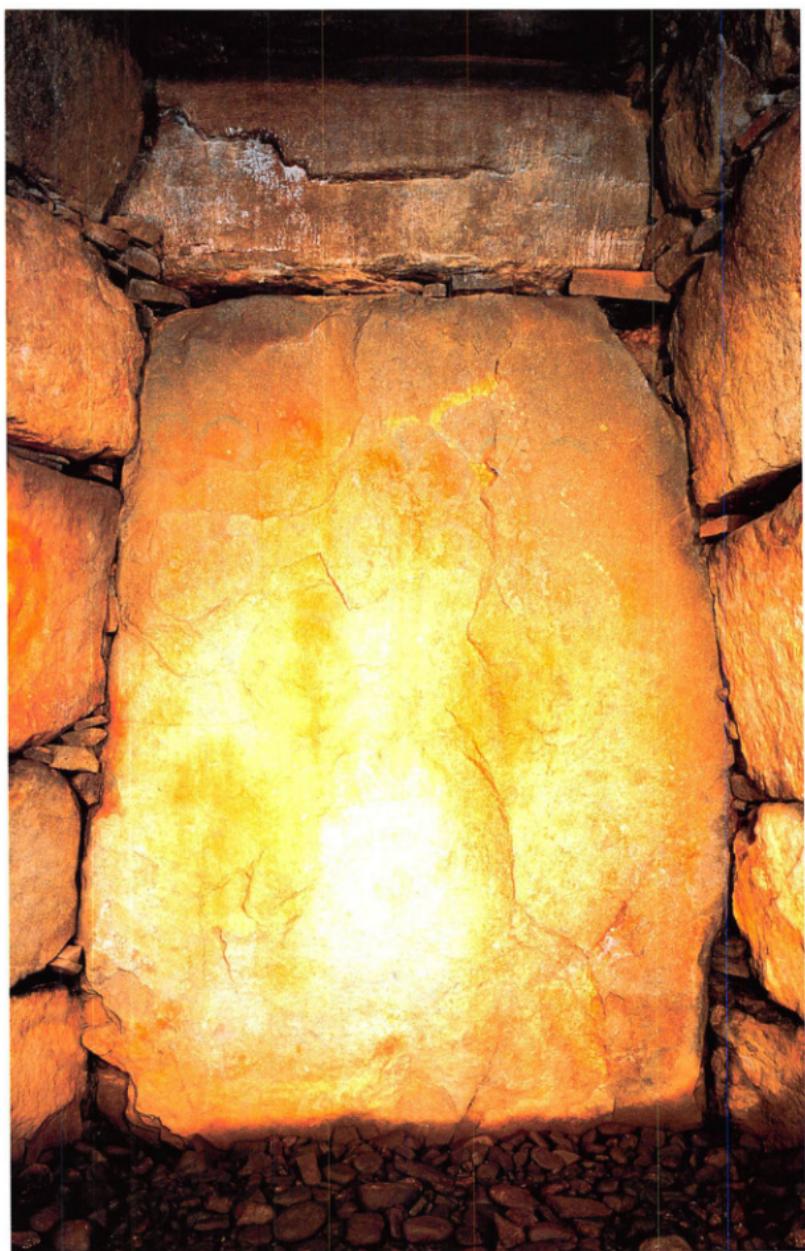
塚花塚古墳出土 銀象眼鉄製柄頭



重定古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



日下八光氏模写絵 後室右侧壁下部壁画 国立歴史民俗博物館提供



塚花塚古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



石人山古墳出土 家形埴輪

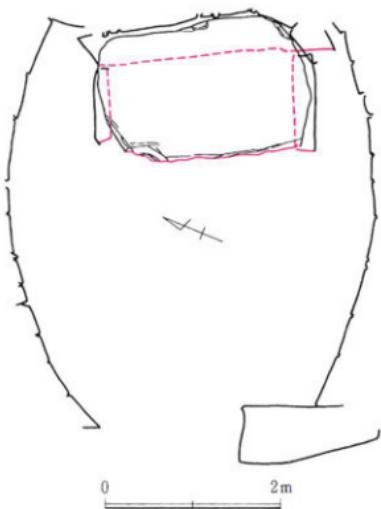


石人山古墳出土 器台

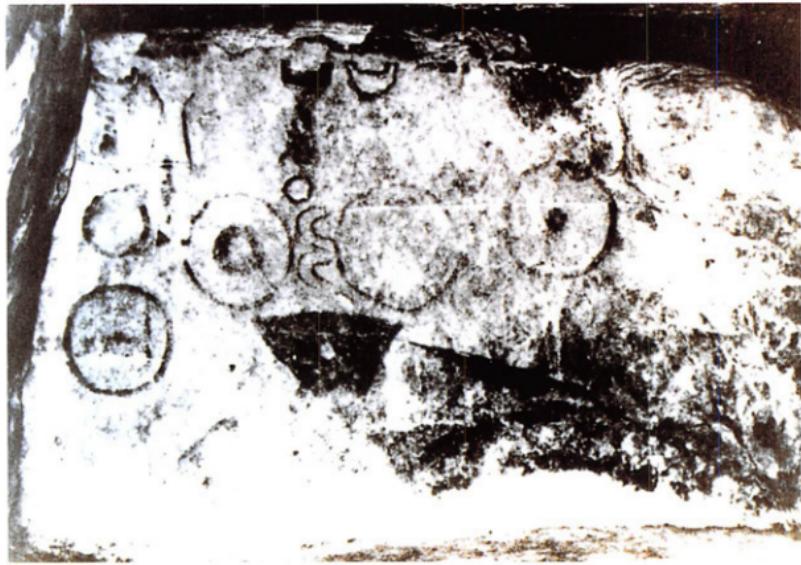
備考	30 弘化谷古墳 (八女古墳群) 八女郡広川町大字広川字弘化谷 国指定史跡
施文の場所	立地
施文の場所	埴丘
施文の場所	主体部
施文の場所	装飾
施文の場所	石室形 (奥壁・天井・側壁)
施文方法	同心円文・円文・双輪状文・三角連続文・假
遺物及び種類	須恵器 (高杯・提瓶)
築造年代	六世紀前半



石人山古墳出土 家形埴輪



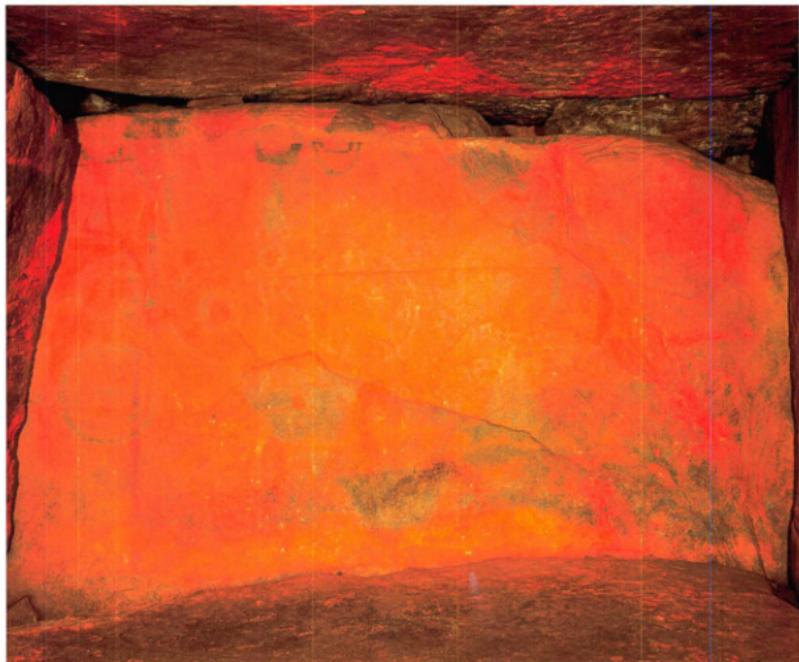
弘化谷古墳出土 提瓶



弘化谷古墳 石室奥壁の赤外線写真 広川町教育委員会提供



石人山古墳 家形石棺蓋の線刻 九州歴史資料館提供



弘化谷古墳 石室奥壁の壁画 九州歴史資料館提供

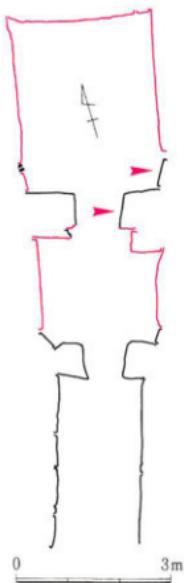


31

ノリバ  
乗場古墳

(八女古墳群) 八女市大字吉田字馬場 国指定史跡

立地	丘陵上	標高約六十m
墳丘	前方後円墳	全長約六十m
主体部	複室構穴式石室	(南北向に開口)
装飾	同心円文・二角連続文・藤手文・翳・叔	
圖文の場所	後室奥壁・左右側壁・前室・玄門柱石の前室上面	
施文方法及び種類	馬具・装飾品・武器・須恵器(高杯・提瓶)	
遺物	六世紀中葉	
築造年代	「筑後守上軍談」には石人 <small>（いしにん）</small> が立っていたと記述がある。	
備考		



乗場古墳出土 人物埴輪頭部

乗場古墳出土 円筒埴輪



乗場古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



32

**丸山塚古墳** (マルヤマツカ  
古墳群) 八女市大字塩間田字土上

国指定史跡



丸山塚古墳 墳丘の現状

備考

装飾

主体部

施文方法

及び種類

遺物

築造年代

後室奥壁・前室右奥袖石、左通路

丘陵上

円墳

複室横穴式石室

(八女古墳群)

33

**釘崎六号墳** (クボサキ  
古墳群) 八女市豊福字釘崎・久保・長原

県指定史跡

備考

装飾

主体部

施文方法

及び種類

遺物

築造年代

不明

円墳

横穴式石室

(釘崎古墳群)

**倉永古墳** (クラナガ  
古墳) 大牟田市大字倉永字甘木山

県指定史跡

備考

装飾

主体部

施文方法

及び種類

遺物

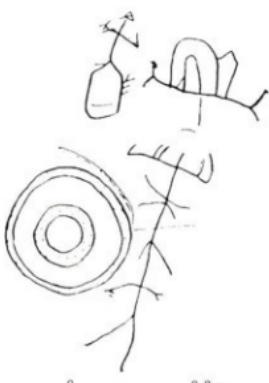
築造年代

不明

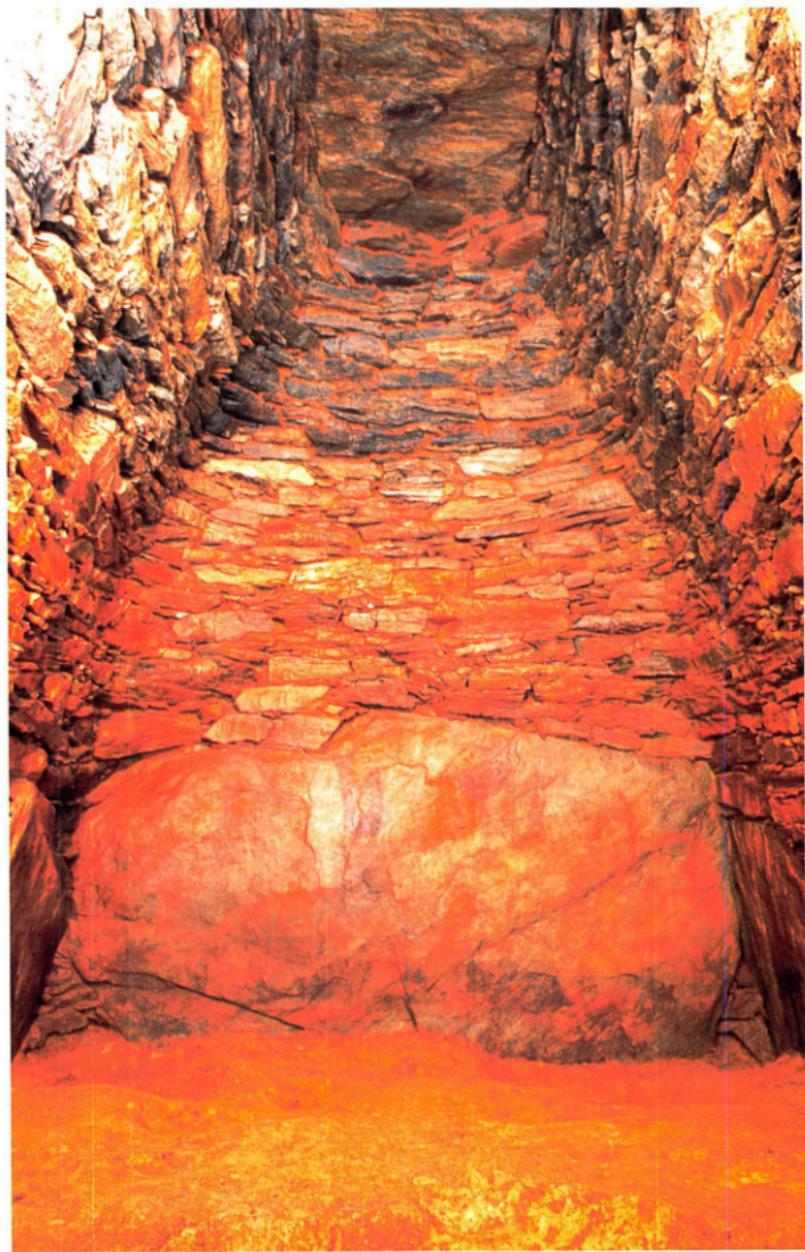
不明

不明

(八女古墳群)



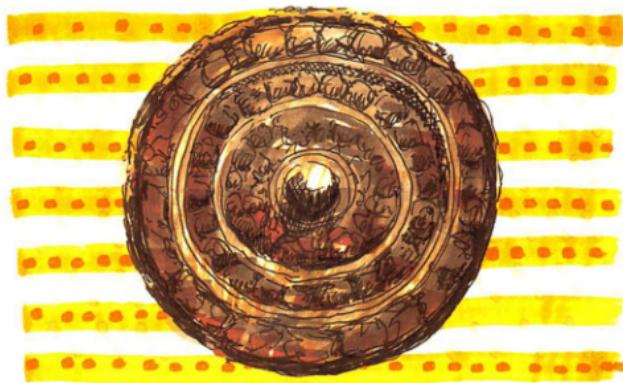
倉永古墳装飾文様



丸山塚古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



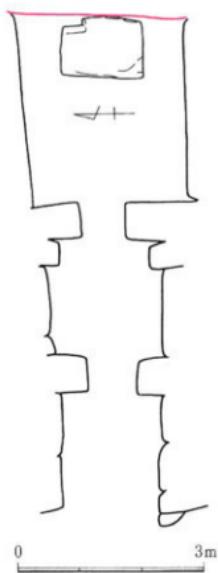
倉永古墳装飾石材の線刻壁画





35 萩ノ尾古墳 ハギノオトコウツ

大牟田市東萩ノ尾町一九〇 国指定史跡



立地 台地上  
墳丘 円墳 直径十六m  
主体部 复室横穴式石室  
装飾 後室石棚下  
施文方法 台地上  
及び種類 彩色(赤)  
遺物 不明  
築造年代 六世紀後半  
石棚有り

図文の場所 同心円文・円文・三角文・盾・ゴンドラ

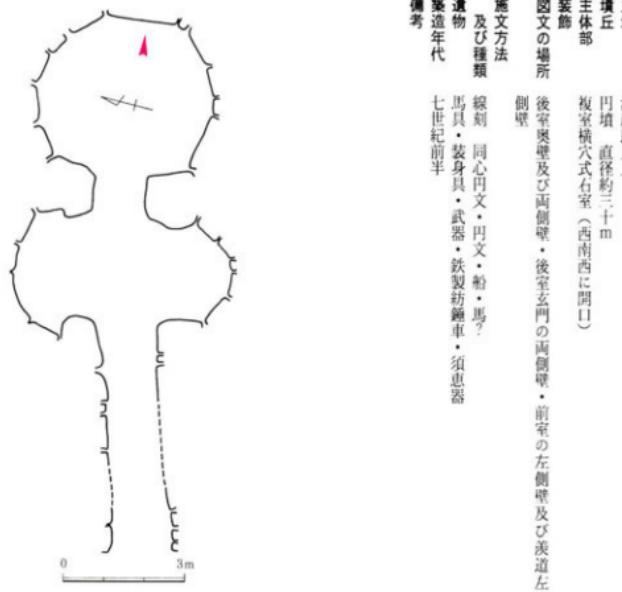


萩ノ尾古墳 奥壁の壁画 九州歴史資料館提供

36 狐塚古墳  
キツネヅカ

朝倉郡朝倉町大字入地字狐塚

県指定史跡



37 宮地獄古墳  
ミヤジジダケ

(宮地獄古墳群) 朝倉郡朝倉町大字宮野子湯の隈

県指定史跡





観音塚古墳 後室袖石及び奥壁の壁画

39

仙道古墳 センドウコブン

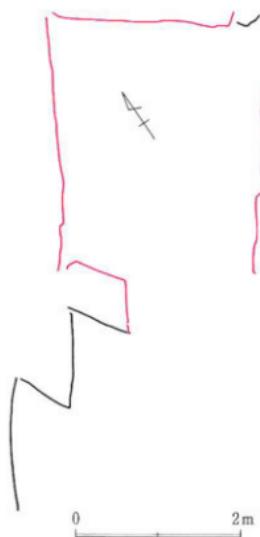
朝倉郡二輪町大字久光仙道

国指定史跡

備考  
墓造年代  
施文方法  
図文の場所  
主体部  
埴飾  
墳丘

複室横穴式石室  
玄室  
円墳  
六世紀中葉

彩色（赤・緑）  
不明  
同心円文・三角文・三角文





仙道古墳 装飾石材の壁面 九州歴史資料館提供



備考  
築造年代

遺物  
須恵器（鉄器、装飾品は所在不明）  
六世紀後半

施文方法  
及び種類  
彩色（赤・黒・緑）  
鹿?、鶴、蟹、船、家

立地  
墳丘  
主体部  
図文の場所  
複式横穴式石室（南西方向に開口）  
後室奥壁上下端、左右側壁、前室（右側壁）

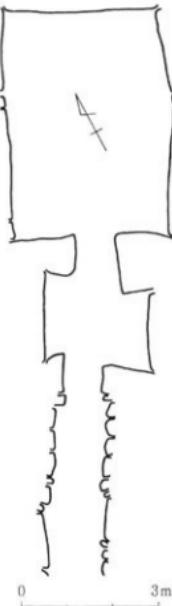
40  
五郎山古墳  
筑紫野市大字原田字五郎山  
国指定史跡  
丘陵上に占地  
円墳 直径三十四m



仙道古墳 盾持人物埴輪 甘木歴史資料館提供



五郎山古墳出土 提瓶





五郎山古墳奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



日下八光氏模写絵 国立歴史民俗博物館提供



41

殿様塚一号墳

トノサマヅカ

筑紫野市大字山家六区

山頂の尾根筋  
円墳 直径約二十m  
複室横穴式石室（南北方向に開口）

國文の場所	施文方法
奥壁、左側壁	及び種類
彩色（赤・黄・緑）	遺物
同心円文、盾、円文らしいが不明	不明
不明	製造年代

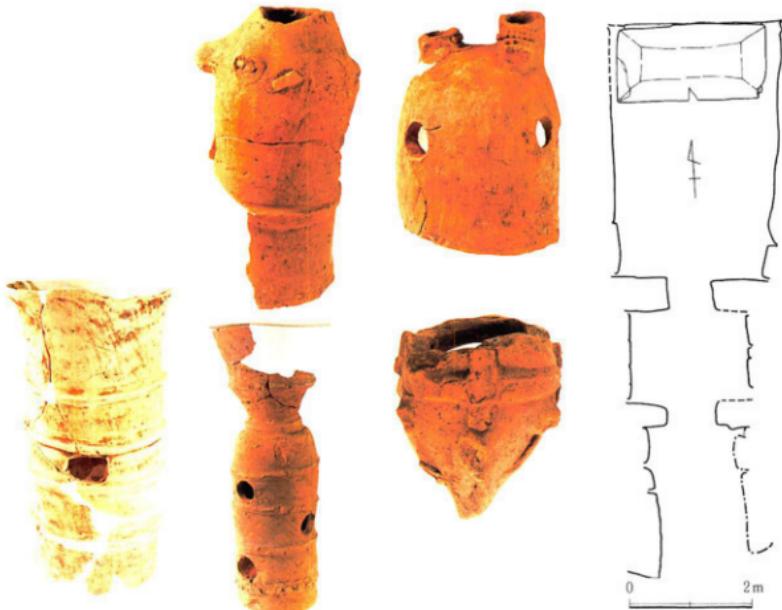
42 東光寺剣塚古墳 福岡市博多区竹下三丁目一  
古墳（アマミヤ） 高古墳

**埴丘**  
前方後円墳（総長約二六m、埴長約七十五m）  
**主体部**  
複室横穴式石室（奥壁に沿って石屋形有り）

図文の場所  
施文方法 玄室（左側壁）

遺物  
及び其類  
装身具・須恵器・円筒・朝顔形埴輪VI式・器財埴輪(福岡市埋蔵文  
化財センター)

築造年代  
六世紀中葉  
(別名 東光寺古墳)



東光寺剣塚古墳出土遺物 福岡市埋蔵文化財センター提供



東光寺剣塚古墳縁刻の石材 福岡市埋蔵文化財センター提供

43

## 吉武七号墳

(金武古墳群)

福岡市西区大字金武字鳥越

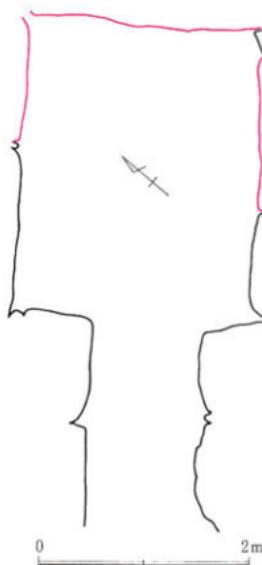
ヨシタケ

円墳(推定直径十六m)

横穴式石室(南東に開口)

主体部  
施文方法  
図文の場所  
装飾  
遺物  
墓造年代  
備考

後室奥壁腰石・両側壁腰石  
彩色(赤)の字渦文・小人物  
不明  
六世紀後半





吉武 7号墳 奥壁の壁画 福岡市埋蔵文化財センター提供



44 権現塚古墳  
（ブンゲンヅカ）  
筑紫郡那珂川町大字片細字觀音堂

備考  
築造年代  
施文方法  
及び種類  
遺物  
不明  
彩色（赤）  
不明  
円文

墳丘  
主体部  
装飾  
横穴式石室



権現塚古墳 装飾石材の現状



権現塚古墳 発見当時の装飾石材 稲田康雄氏提供



権現塚古墳 現在残っている装飾文様

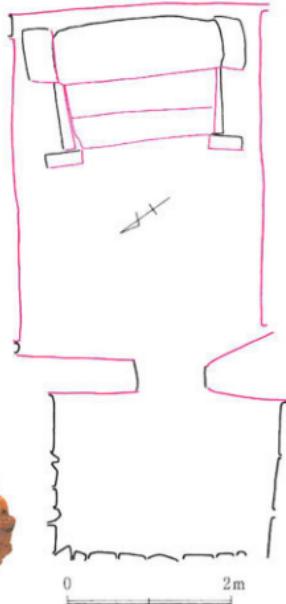


## 45 王塚古墳 オウヅカコバン

嘉穂郡桂川町大字寿命字坂元 特別国指定史跡



王塚古墳出土 蓋 オウヅカガマツ



王塚古墳出土 蓋 オウヅカガマツ

立地 段丘上 標高三十五m  
墳丘 前方後円墳 墳長 約八十m  
主体部 楕円式石室（石屋形があり、奥壁に石棚）  
装飾 遺物 六世紀中葉  
築造年代 (別名 寿命王塚古墳)

施文方法 前室・後室・石屋形  
及び種類 彩色（赤・黒・白・緑・黄） 三角文・円文・同心円文・双脚輪状文・轍・盾・大刀・弓・藤手文・騎馬像

遺物 鏡・装身具・武具・武器・馬具・工具・円筒・朝顔形埴輪V式

図文の場所 前室・後室・石屋形  
施文方法 彩色（赤・黒・白・緑） 三角文・円文・同心円文・双脚輪状文・轍・盾・大刀・弓・藤手文・騎馬像

及び種類 鏡・装身具・武具・武器・馬具・工具・円筒・朝顔形埴輪V式

図文の場所 前室・後室・石屋形  
施文方法 彩色（赤・黒・白・緑） 三角文・円文・同心円文・双脚輪状文・轍・盾・大刀・弓・藤手文・騎馬像

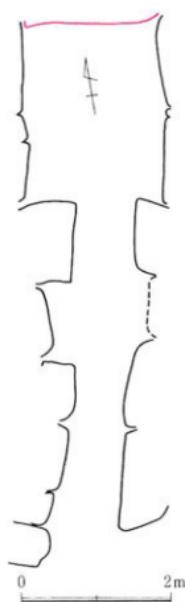
及び種類 鏡・装身具・武具・武器・馬具・工具・円筒・朝顔形埴輪V式

図文の場所 前室・後室・石屋形  
施文方法 彩色（赤・黒・白・緑） 三角文・円文・同心円文・双脚輪状文・轍・盾・大刀・弓・藤手文・騎馬像

及び種類 鏡・装身具・武具・武器・馬具・工具・円筒・朝顔形埴輪V式

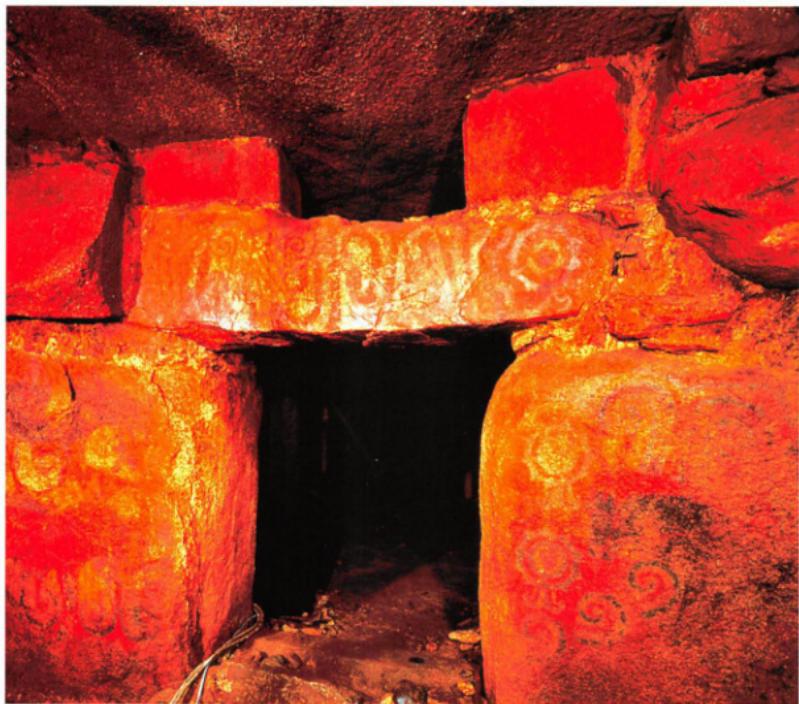
## 46 川島古墳 カワシマコバン

川島古墳群 飯塚市大字川島字荒牧 県指定史跡



立地 円墳（径約十五m）  
墳丘 後室構六式石室  
主体部 装飾  
装飾 遺物  
築造年代 一九八九年に発掘調査実施

施文方法 後室奥壁腰右  
及び種類 彩色（赤・白・黒） 円文・三角文  
遺物 目製飾金貝・馬貝・鉄器（武器）・装飾品・須恵器・土師器・石鏡・  
軒鏡車



王塚古墳前室奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



王塚古墳後室右灯明台石前面の壁画 九州歴史資料館提供



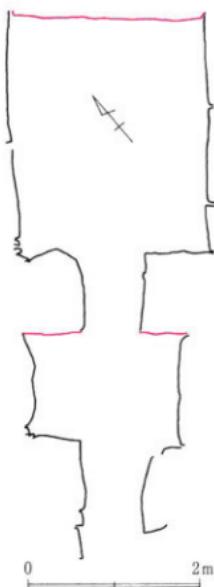
川島古墳奥壁の壁画 九州歴史資料館提供



47

# 竹原古墳

タケハラ  
鞍手郡若宮町大字竹原字切立 国指定史跡



参考	図文の場所	立地
装飾	東壁下段及び玄関部前室前面	台地上
主体部	円墳（径十八m）	複室横穴式石室
墳丘	遺物	
立地	施文方法	
	及び種類	
	彩色（赤・黒）獣・人物・馬・怪獣・船・連続三角文	
	朱雀・玄武・	
	装飾品・鉄器（武器）・馬具・須磨器	
	遺物	
	朱雀・玄武・	
	装飾品・鉄器（武器）・馬具・須磨器	
	築造年代	
	六世紀後半	



竹原古墳出土馬具



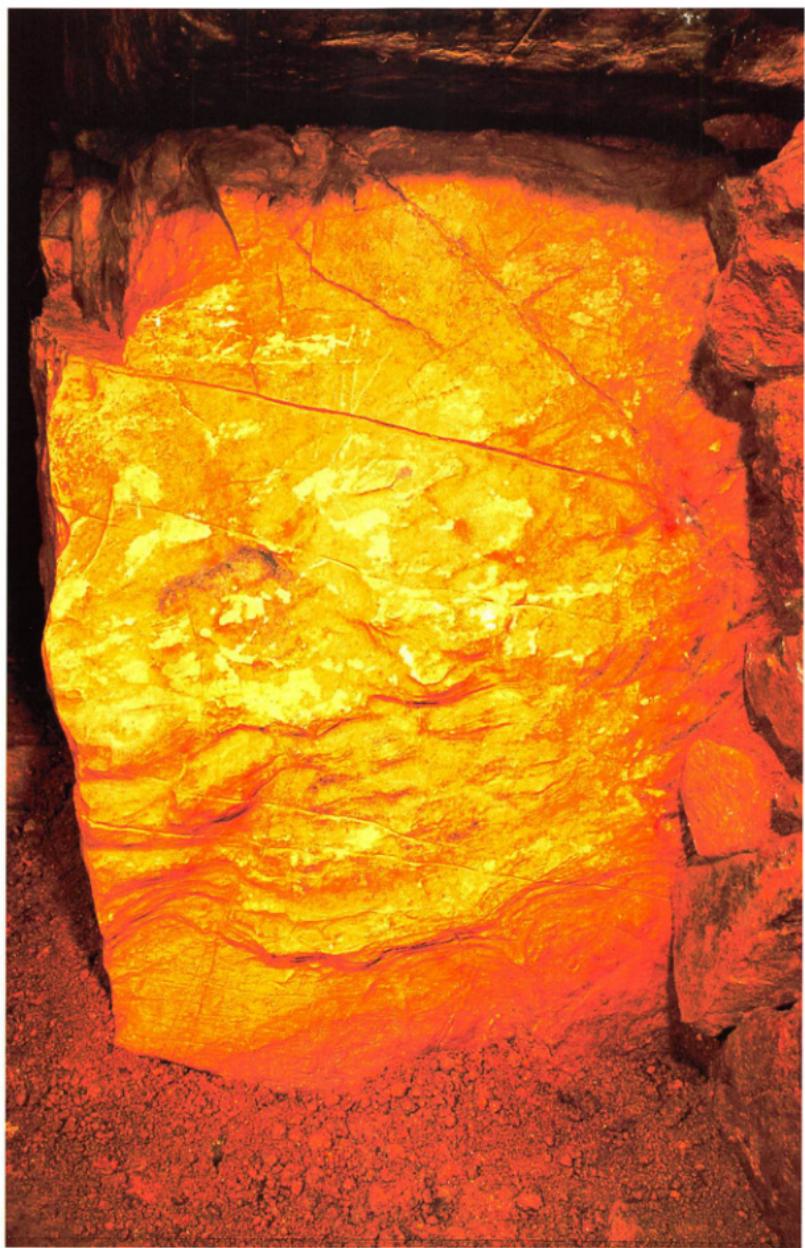
竹原古墳出土馬具



竹原古墳出土馬具



竹原古墳出土馬具



竹原古墳玄門右袖石裝飾 九州歴史資料館提供



竹原古墳玄門左袖石裝飾 九州歴史資料館提供



竹原古墳後室奥壁裝飾 九州歴史資料館提供



48

## 損ヶ熊古墳

（ソンガクマ）鞍手郡若宮町大字原田字損ヶ熊

立地  
台地上  
墳丘  
複室横穴式石室  
主体部  
装飾  
施文方法  
及び種類  
遺物  
製造年代  
備考

奥壁

台地上

円墳（径約：11m）

複室横穴式石室

施文方法

彩色（赤）、直線や横線・斜線等幾何学的文様

鐵器（武器）・須恵器

六世紀末



損ヶ熊古墳遠景 若宮町教育委員会提供



損ヶ熊古墳出土須恵器



損ヶ熊古墳出土須恵器



損ヶ熊古墳出土須恵器



損ヶ熊古墳出土須恵器



損ヶ熊古墳後室奥壁裝飾 若宮町教育委員会提供



## 49 桜京古墳

宗像郡玄海町大字牟田尻字桜京 国指定史跡

主体部

立地

山尾根上

前方後凹墳

(増長四十一号)

墳丘

複室横穴式石室

装飾

圖文の場所

石屋形(奥壁腰石と側柱)

施文方法

線刻後彩色(赤、黄、绿)

及び種類

遺物

不明

篆造年代

不明

備考

(旧名称 桜京二号墳)

## 50 土手の内横穴墓一号

中間市下大隈大字垣生字土手の内

主体部

複室横穴式石室

装飾

圖文の場所

石屋形(奥壁腰石と側柱)

施文方法

線刻後彩色(赤、黄、绿)

及び種類

遺物

不明

篆造年代

不明

備考

(旧名称 桜京二号墳)

## 51 瀬戸横穴墓群十四号

中間市大字垣生字瀬戸  
主体部

平入り玄室

複室横穴式石室

装飾

圖文の場所

玄室奥壁

施文方法

線刻、彩色(赤)

及び種類

遺物

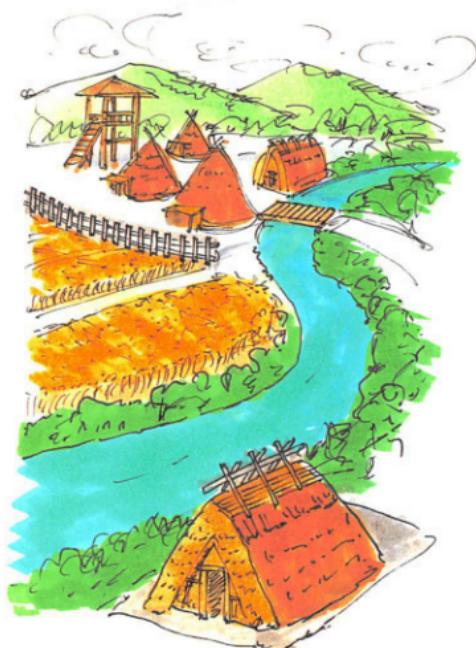
不明

篆造年代

不明

備考

(旧名称 瀬戸口横穴墓)





52

## 垣生羅漢山横穴墓三一号

中間市大字垣生字羅漢山  
県指定史跡

平入り複室横穴墓

主体部

装飾

図文の場所  
前室

施文方法  
及び種類

縞刻鳥  
装飾品・武器・須恵器

備考  
遺物

後生の落書き等で岡柄の特定は難しい(別名  
横穴・垣生羅漢百穴)

53

## 日明一本松塚古墳

北九州市小倉北区日明二丁目  
市指定史跡

円墳

墳丘

横穴式石室

図文の場所  
主体部

後室・奥壁

施文方法  
及び種類

彩色(赤)  
放射状線

須恵器・上漆器・馬具・装飾品・武器

備考  
遺物

六世紀後半

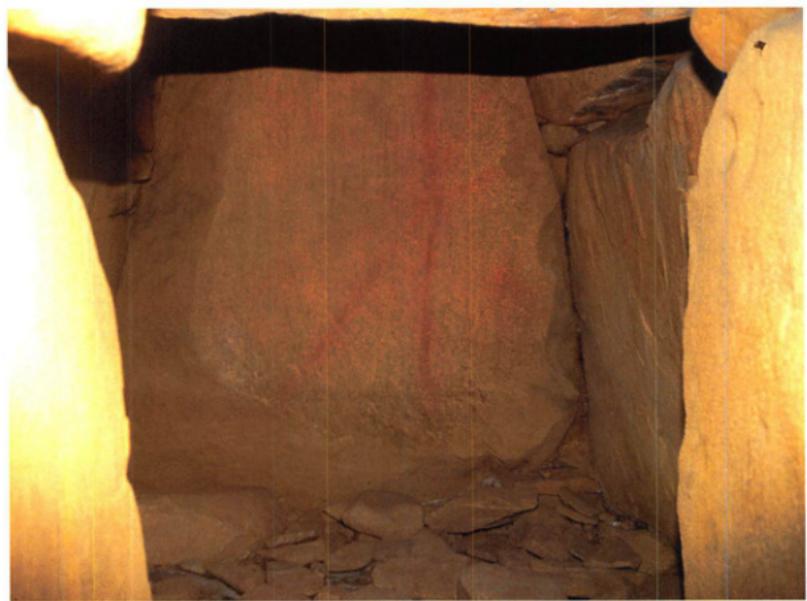
築造年代

備考



日明一本松塚古墳出土遺物

北九州市立考古博物館提供



日明一本松塚古墳後室奥壁装飾



54  
相坂横穴墓十四号  
アイサカ  
主体部  
施文方法  
及び種類  
遺物  
築造年代  
備考

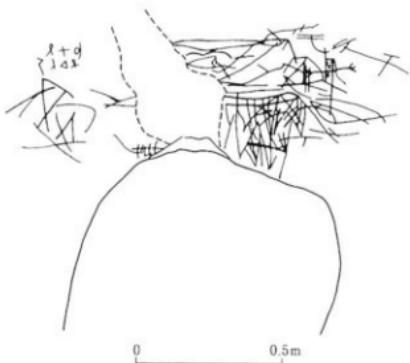


相坂横穴墓14号裝飾玄門上線刻画（鳥等） 北九州市教育委員会提供

アーチ式玄室  
玄門上方壁面から天井にかけて  
須恵器（人物像、鳥、木の葉、魚）、天井部に斜格子が見られる。  
須恵器（杯蓋、杯身、提瓶）  
七世紀前半



相坂横穴墓14号出土遺物



相坂横穴墓14号出土遺物



相坂横穴墓14号裝飾玄門右上線刻画（人物）



55

相坂横穴墓十五号  
（ハイサカ  
サイボウケンブツジイチゴウ）

北九州市八幡西区大字木城

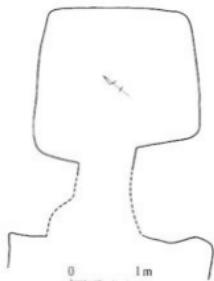
備考	妻入り式玄室
施文方法	玄室壁面
遺物及び種類	綾織、格子模様 須恵器（杯蓋、杯身、提鉢）
築造年代	七世紀前半



相坂横穴墓15号線刻画（格子・綾織模様） 北九州市教育委員会提供



相坂横穴墓出土遺物 北九州市教育委員会提供



相坂横穴墓出土遺物 北九州市教育委員会提供



相坂横穴墓出土遺物 北九州市教育委員会提供

## 56 百留横穴墓群一号墳

築上郡大平村大字百留

装飾	図文の場所	入口縁周辺
施文方法	及び種類	
遺物	彩色（赤・黄）円文	
築造年代	不明	
備考		

## 57 百留横穴墓群二号墳

築上郡大平村大字百留

装飾	図文の場所	入口縁周辺
施文方法	及び種類	
遺物	彩色（赤・黄）円文	
築造年代	不明	
備考		

## 58 百留横穴墓群三号墳

築上郡大平村大字百留

装飾	図文の場所	入口縁周辺
施文方法	及び種類	
遺物	彩色（赤・黄）円文	
築造年代	不明	
備考		





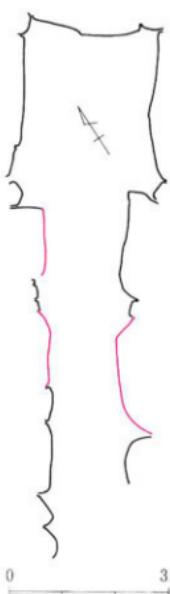
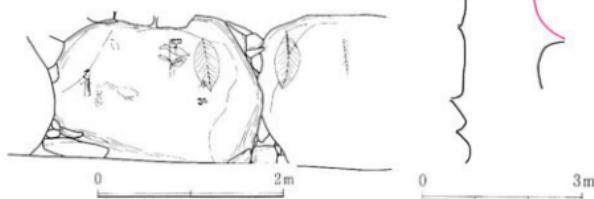
59

# 穴ヶ葉山一號墳

(穴ヶ葉山古墳群)

築上郡大平村大学下原原穴ヶ葉山  
国指定史跡

墳丘	59
主体部	穴ヶ葉山
内填	アナガハヤマ
装飾	横穴式石室
圖文の場所	後室・羨道両壁
施文方法	線刻
及び種類	木の葉、鳥、亀、蟹、魚、樹木、旗、格子目
遺物	不明
築造年代	後明
備考	

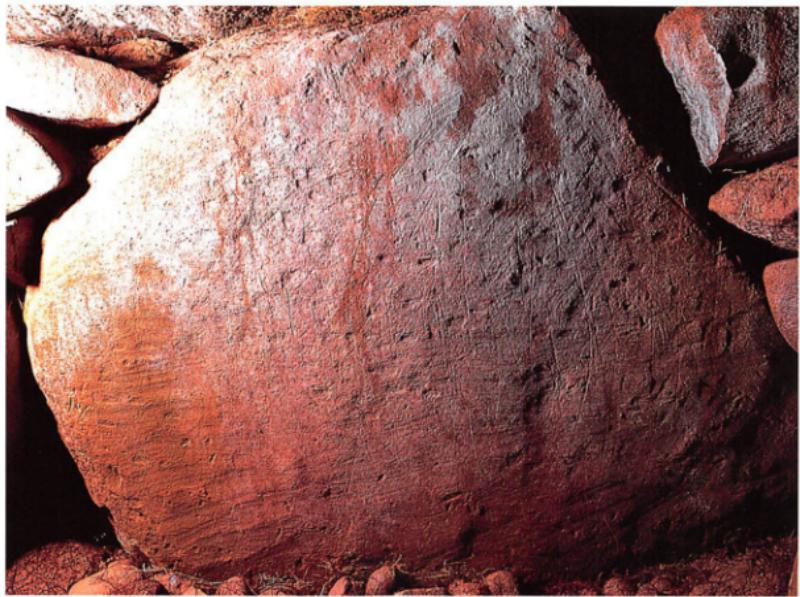
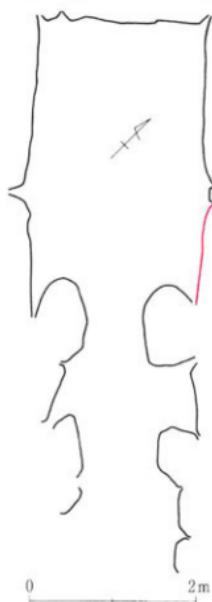


穴ヶ葉山古墳 1号墳装飾 九州歴史資料館提供

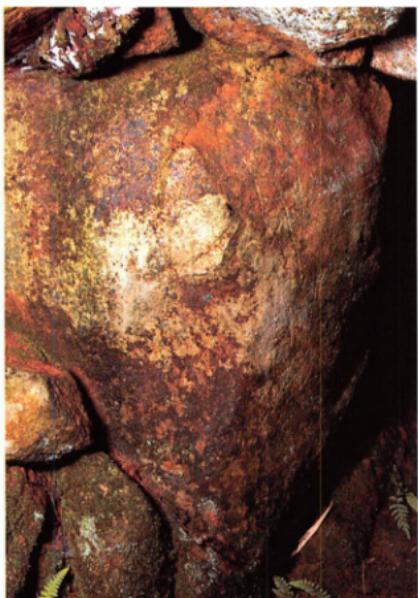


60 穴ヶ葉山三号墳  
アナガハヤマ  
(穴ヶ葉山古墳群)  
築上郡大平村大字下唐原字穴ヶ葉山

備考  
墳丘  
主体部  
施文方法  
図文の場所  
後室右側壁  
遺物  
及び種類  
複室横穴式石室  
装飾  
線刻 木の葉  
築造年代



穴ヶ葉山古墳 3号墳装飾



山田 1号墳 装飾（木の葉文）

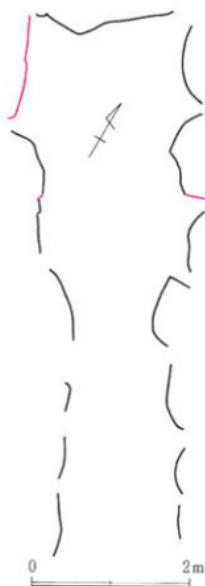
61	山田 1号墳	（ヤマダ ヤマダ 山田古墳群）染土郡新吉富村大字安塙字山田 墳丘 円墳 主体部 横穴式石室 図文の場所 後室 施文方法 及び種類 線刻 木の葉、水鳥、格子目 遺物 木の葉、水鳥、格子目 築造年代 六世紀末 備考 村指定史跡
----	--------	---



山田 1号墳 装飾



山田 1号墳 裝飾

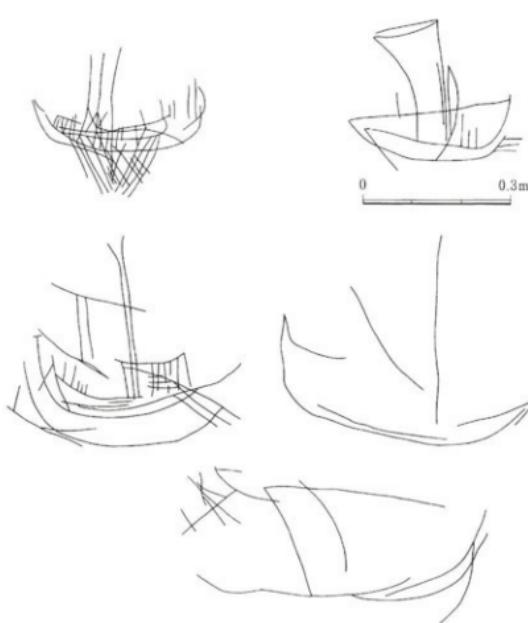


山田1号墳 装飾

62 黒部六号墳  
（黒部古墳群）  
豊前市大字松江字御腰掛 県指定史跡

クロベヘイ

備考	施文方法 及び種類	図文の場所	主体部	墳丘	内填
遺物	線刻	後室	横穴式石室		
墓造年代	帆船			横穴式石室	
六世紀末	船				
	帆				
	駆				
	須恵器・上漆器				



装飾文様分解図

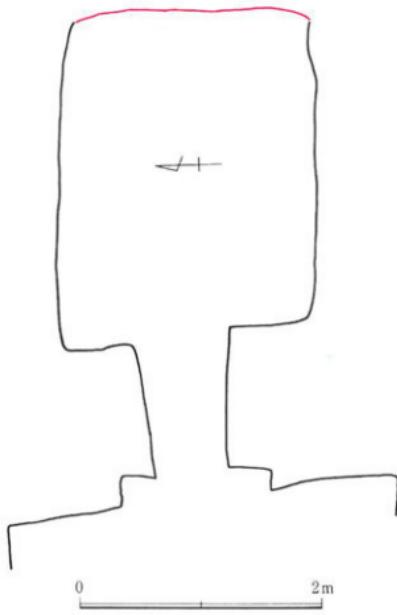




古月横穴出土遺物



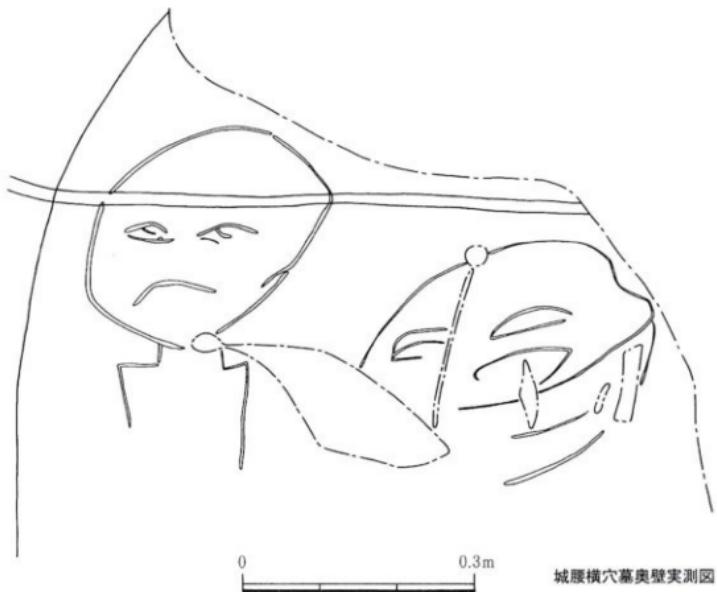
古月横穴出土遺物



## 66 城腰横穴墓

ジヨウノホコシ  
嘉穂郡頴田町大字佐与子城腰

- 装飾
- 図文の場所 玄室奥壁
- 施文方法
- 及び種類
- 遺物
- 筆造年代 六世紀末
- 備考
- 須恵器、鉄器（武器）  
城腰遺跡内に存在



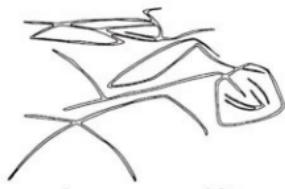
城腰横穴墓奥壁実測図



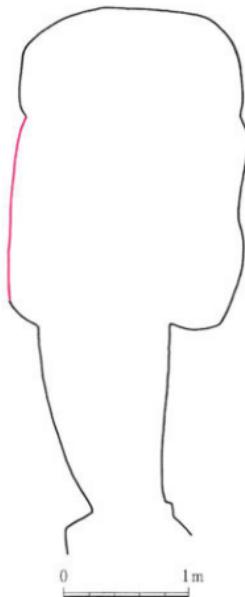
城腰横穴墓奥壁裝飾 緑田町教育委員会提供

67 水町横穴墓A十三—一號墳

直方市大字上境字水町1号ほか



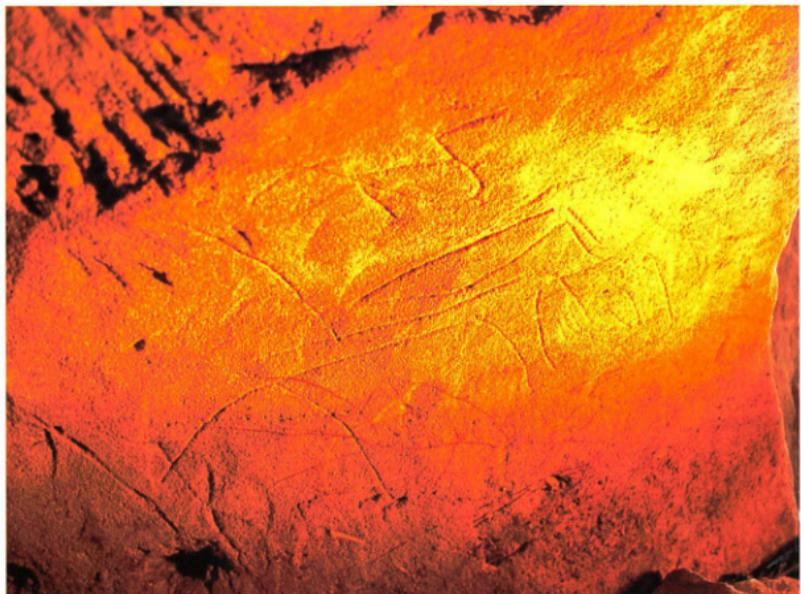
線刻画実測図



装飾  
圖文の場所  
施文方法  
及び種類  
遺物  
墓造年代  
備考  
玄室左側壁  
七世紀前半  
直方市史では八号墳と記載。



水町横穴遠景 直方市教育委員会提供



水町横穴A13-1号玄室左側壁装飾 直方市教育委員会提供

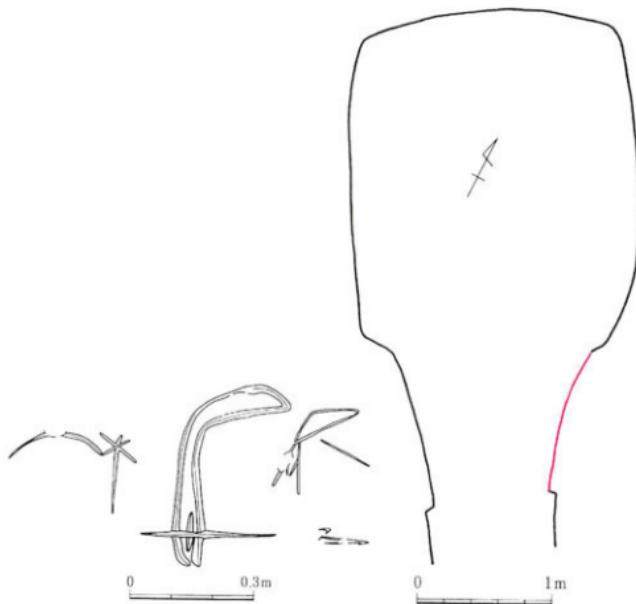
68 水町横穴墓B十八—一号墳

直方市大字境子水町1-ほか

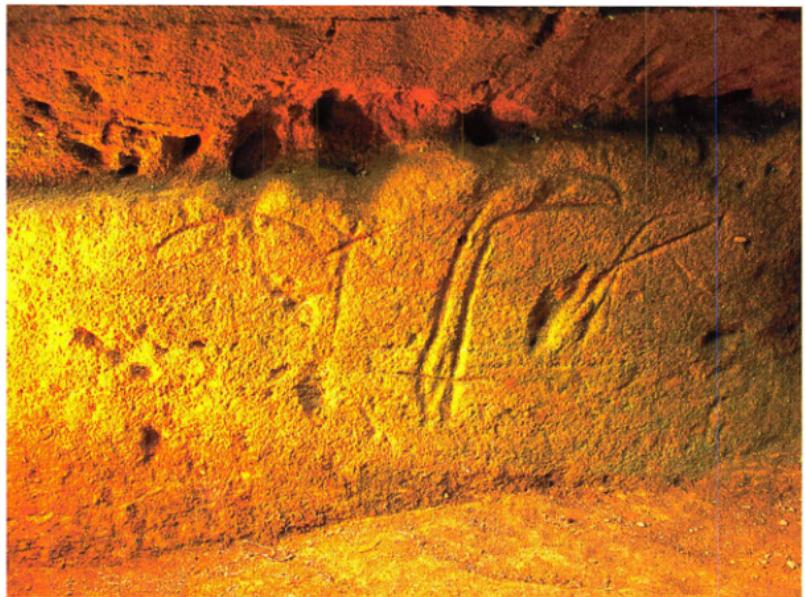
装飾  
國文の場所  
施文方法  
及び種類  
遺物  
築造年代  
備考

横道右側壁  
淡道右側壁

線刻（鳥等）  
武器・裝身具・須惠器  
七世紀前半



水町横穴墓B18-1号墳横道右側壁装飾実測図

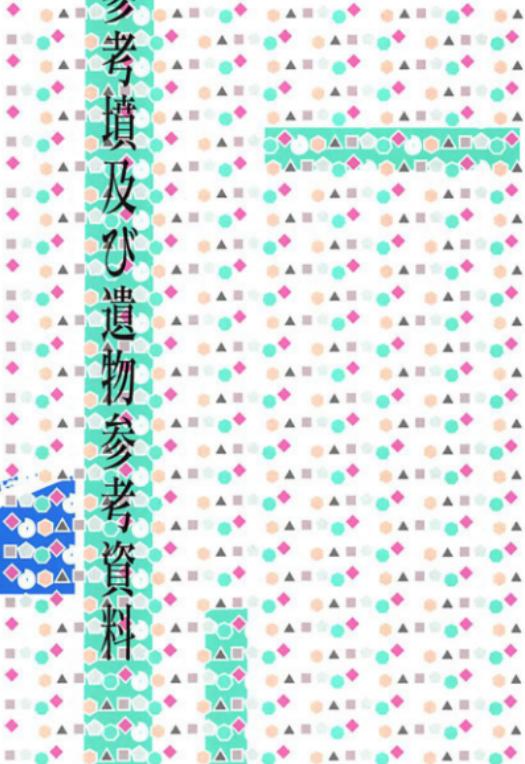


水町横穴墓B18-1号墳横道右側壁装飾 直方市教育委員会提供

# 装飾古墳参考墳及び遺物参考資料

## 装飾古墳参考墳

今まで装飾古墳地名表のなかで挙げられていたが、今回の調査では、装飾古墳の定義と照らし合わせた結果、墳とは分けて取り扱つた。しかし、完全に装飾文様として否定したものではない。





## ○裝飾古墳参考墳

1 小田茶臼塚古墳 甘木市大字小田字茶臼塚  
オダチヤクスヅカ  
前方後円墳

埴丘

主体部

遺物

築造年代

国指定史跡

横穴式石室

短甲・衝角付冑・铁矛・須恵器

(器台・大甕)

石斧

五世紀後半

装飾文様と思われるのは、後室に彫刻(?)で、X字文・井桁状文、直線で描かれているが今は装飾文様のなかでは捉えられないと判断し参考墳とする。



小田茶臼塚古墳出土 石杆（いしきね） 甘木歴史資料館提供



小田茶臼塚古墳出土 大壺 甘木歴史資料館提供



小田茶臼塚古墳出土 器台 甘木歴史資料館提供



小田茶臼塚古墳出土 短甲 甘木歴史資料館提供



小田茶臼塚古墳出土 銜角付冑・鉄矛

2 倉永茶臼塚1号墳  
(倉永茶臼塚古墳群)  
大牟田市大字倉永字茶臼塚

墳丘  
主体部  
遺物  
築造年代

円墳  
堅穴式石室  
鐵劍・円筒埴輪

五世紀前半  
石棺北壁に、幾何学文様が確認されるが装飾文様とは判断されにくい。



遺物参考資料

1 次郎太郎古墳

ジロウタロウ

墳丘  
前方後円墳

主体部

横穴式石室

遺物

円筒埴輪、盾形埴輪、須恵器

築造年代

六世紀前半

備考

消滅



次郎太郎古墳出土 盾形埴輪（裏）・（表）

2 沖出古墳

オキイデ

墳丘  
前方後円墳

主体部

不明

遺物

家形埴輪ほか

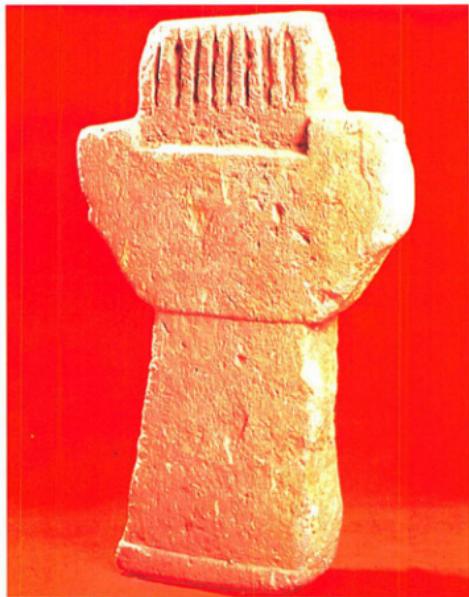
築造年代

不明

備考



沖出古墳出土 家形埴輪



岩戸山古墳 鞘（矢筒） 八女市教育委員会提供

3	岩戸山古墳	（イワトヤマ）	八女市大字吉田	国指定史跡
墳丘	前方後円墳			
主体部	未調査のため不明			
遺物	円筒埴輪、石製品多数			
築造年代	六世紀前半			
備考	鞍井の墓と想定されている古墳で別区が見られる。			



岩戸山古墳別区より



4

塚堂古墳  
(若宮古墳群) 漢羽郡吉井町大字徳丸

塚丘  
前方後円墳  
主体部  
遺物  
横穴式石室  
築造年代

盾形埴輪、人物埴輪頭部ほか  
同じ古墳群内に日岡古墳が存在する。



塚堂古墳出土 盾形埴輪



塚堂古墳出土 武装埴輪頭部



## 参考

伝 稲荷山古墳出土石甲

県指定有形文化財

大牟田市稲荷町（現在の三井東庄化学工場敷地内の妙平山より出土）

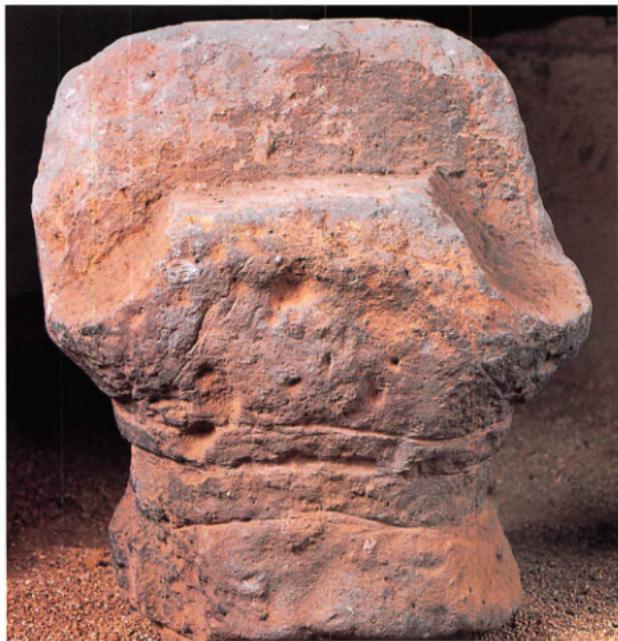
墳丘

消滅

共伴遺物

不明

築造年代  
五世紀



稻荷山古墳出土石製短甲

## 「王塚古墳」の発見と保存の歴史

王塚美術古墳館 学芸員 長谷川清之

水は長く王塚古墳を苦しめた。当時の写真や新聞をみると、石室内に膝立ちまで浸かった状態は、誠に痛ましい。これを西村さんは、「地元住民と一緒になり、手押しの消防ポンプで汲みだしたこともある。また、雨漏り防止のため、自費で墳丘に防水用の便瓦で補修を行ったこともあった。

西村さんの逸話のなかでよく知られるのは、戦後、王塚古墳の地下で石炭採掘がおこなわれることとなつた際のことである。当時、敗戦後で生産力の復興が最優先していた当時、石炭と古墳の保存では、比較できるものではなかった。そのなかで家業も放り出して古墳保護の先頭に立っている。当時のことを「石炭採掘をめぐり、業者が次々と『西村』をつぶせと押しかけた。脅迫や脅しは問題ないが、一番困ったのは知人の情実でこられた時である。身が縮まる思いで、いま思い出してもぞっとする。」気性の荒い土地柄のなかで、当時の緊張した様子が伺える。その後、地元・町をあげての反対運動となり、結局石炭採掘は中止となる。

まさに、住民運動で文化財を保護した先駆的なものである。

このほかにも、紹介すべき人はたくさんいる。どなたも王塚古墳の保存には大きな役割をはたした人たちである。しかし、残念ながら、年月の移り変わりのなかで、多くの人が他界され、王塚古墳にまつわる多くのエピソードが忘れられようとしている。特に、保存整備の行われた十三年間は、王塚古墳古墳とそれを取り巻く環境にも転換期であったようだ。この間「発見五十周年記念行事」や「日下八光氏の壁画模写展」などを開催し王塚古墳関連の知られていない逸話や写真資料を発掘するいい機会をつくことができた。このような、行事や事業の関係で私も運良く西

早いもので私が王塚古墳と関わりをもつて十七年目になる。王塚古墳は、装飾古墳の至宝として、奈良県の高松塚古墳と並び国の特別史跡に指定されている。長らく抜本的な整備を求められていたが、昭和五十七年から十三年にわたる保存整備事業を行つた。その結果、防水設備の施された墳丘の復元、石室内を外気より遮断し、空調設備の整つた保存施設等、装飾古墳の王者たるにふさわしい最新・最大規模の設備が完成した。平成二年には、じつに二十二年ぶりに石室内部の壁画も公開された。もう一つの懸念であった資料館（王塚装飾古墳館）も平成六年に開館し、内部に展示している実物大の石室や出土品のレプリカ、全国の代表的な装飾古墳の1/5模型などは、好評を博している。関係者の一人として非常に感慨深いものがある。

しかし、それとは裏腹に、発見から今日に至るまで多くの試練を乗り越えてきた。まさに、現在の遺跡や装飾古墳が抱える問題を昭和九年の発見から半世紀に渡り経験し、多くの人の力で解決してきた。

なかでも、発見当時、地元の村会議員であった西村二馬さんの功績は大きく忘れてはならない。発見当時の迅速で的確な処置は、後生に残すための大きな足がかりとなる。また、装飾古墳の最大の敵は、水とカビと言われているが、なかでも石室内に侵入する



村さんをはじめとして当時を知る人にお会いすることができた。なかでも、発見当時の現場責任者桜島梅太郎氏とは、お元気な頃お会いし発見当時の裏話など、普段聞くことの出来ないようなことも、生々しく聞くことができ、非常に感激したことを覚えている。地元にいる我々は、古墳自体も大切にしていかなくてはならないが、これら、発見からの多くの人たちが培ってきた努力を後生に伝えていくことも、文化財保護行政に携わる者としての責務であると痛感するしだいである。

# 論考

執筆者

福岡県総務部国立博物館対策室長補佐  
石山 熱  
福岡大学文学部教授

小田富士雄



# 福岡県の装飾古墳

先人は新しい文物や情報に接した時、

どのように対応したのだろうか。

福岡県総務部国立博物館対策室 室長補佐

石山 勲

## 1はじめに

仮に、全国の古代史、とりわけ考古学ファンに対して「九州の特色は?」と問うたとすれば、墓室の内外に多彩に表現された壁画・装飾古墳をその一つに挙げる方も多いのではないか。

本来、ヒトはハカを作る動物でもあり、実際、壁画墓は、洋の東西を問わず、土葬地帯に時折存在する。

わが国でも、これまでに約六百基の装飾古墳が知られており、そのうち約三百三十基が鹿児島県下を除く九州に集中している

(拠、国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』一九九三)。つまり、冒頭で述べたように、装飾古墳は九州らしさの証明でもある、といえる。

装飾古墳が考古学ファンを魅了してやまないのは、これらの壁画が本来的にもつ不可思議性と美術性にあるのは無論であるが、以上のように、こうした風習が、中枢である畿内では定着せずに、むしろ、東国や西国など周辺部において盛行・展開していることにもあるのではなかろうか。

## 2各地域の特色

1. 玄界灘沿岸(現福岡市・春日市・大野城市・筑紫野市・太宰府市・宗像市・前原市・古賀市・筑紫郡・柏原郡・宗像郡・糸島郡)

六基と少数であること自体と、孤立的・飛び石的にしか存在せず、墓室に壁画を導入するという風習が定着した痕跡がない点が、最大の特色である。

内陸部にあって肥前・筑前・筑後の三県境に位置する筑紫野市・

五郎山古墳は、県下では珍しく群像表現をとる。奥壁中央の水鳥?

小稿では、文様論・系譜論他の総論ではなく、今回の企画展のテーマである「福岡県の装飾古墳」について、予め提示された県下五地域分割案(15頁(16頁参照))に基づいて各々の地域の特色を述べるとともに、それらを手掛かりとして五地域間あるいはこれらと隣接諸県との間で行われた交流の痕跡をも辿ってみることにしたい。

なお、県下の装飾古墳の数は、既に消滅した分をふくめて七十基以上と推定されるが、これは熊本県下での約1/3に過ぎない。ただし、本県での崖や斜面をくり抜いて墓室とした横穴を含めた古墳総数は一万一千基以上に達するものの、うち前方後円墳は約二百基に過ぎないので、装飾古墳の希少性が自ずと知られる、といえる。

また、これらの装飾古墳の年代は、特に言及しない限り、概ね六世紀後半代と見ていることを、予め、お断りしておきたい。

以下、各地域にみられる特色を摘要する。

は、Vの吉井町・珍敷塚古墳の大型蕨手文に形態上似通う。また、市・川島古墳、若宮町・竹原古墳や、佐賀県鳥栖市・太田古墳との交渉の痕跡を偲ばせている。反面、ここでは三角文は見当たらず、風習として導入しながらも、自己主張することも忘れてはいる。

吉武七号墳は、位置・文様ともに全く孤立的な存在である。絵具の色は違うが、並んで完周しない円文？は、前出飯塚市川島古墳にも見受けられる。

玄海町・桜京古墳の奥壁には、後述するII・IVの地域や肥後との交渉を物語る石屋形（平・長側辺＝正面）入りの横口式家形石棺が原形）が設置されている。図文は、平行線と×印とを組み合わせた浅い割付線による三角文に限られており、円文がない点と赤・緑・黄の三色で塗り分けるのも少数派。

以上を要するに、佐賀県唐津湾周辺を含めても、玄界灘沿岸部では、墓室の内部に壁画を描くという大陸の風習についての様々な情報や、それを導入した筑後や肥後の動向は、当然、もたらされてはいたものの、定着・盛行するには至らなかつたこと自体に、当地域らしさが發揮されているといえる。

II・響灘沿岸と遠賀川流域（現北九州市西半・山田市、田川市、飯塚市、直方市、中間市、田川郡、嘉穂郡、鞍手郡、遠賀郡）

計十四基が知られているが、うち十基を円墳よりも格下の横穴が占めるのは、次に述べるIIIの地域とともに、県下では極めて例。

また、前述Iの地域と同様に、ここでの装飾古墳は、飛び石的

に散在し、分布の中板ではなく周辺にあたるにもかかわらず、一時期を画する程傑出した内容をもつ複数例が点在する点は、当地域の最大の特色である。

例えば、中間市・瀬戸十四号横穴では、四注（寄棟）造家屋の木組みを彫刻で模した墓室の奥壁と両側壁とに、彫刻と彩色（赤）を併用して、馬に乗り矢を射る（騎射）人物や、鹿他を含む狩猟図や、鳥・船・円・三日月・格子状文を表現していたという。前出五郎山古墳の群像に匹敵する県下でも有数な壁画が孤立的に存在することの意義がまさに問われるが、発見後半年余りの昭和三十二年二月に採土のための発破の余震で崩壊・消滅したのは、痛恨の極みである。

六世紀中頃にはつくられた当地域最古の装飾古墳である桂川町・王塚古墳は、その名に恥じない実に豪壮な奥津城である。色数では最多の五色（赤・黒・白・黄・緑）を使い、壁のまさに全面を各種の図像を描くか赤一色で塗り潰すかする点と、連続三角文の多用と珍しい双脚輪状文とが目立つもの、逆に、同心円文は影がうすい、等が特色。また、石室の構造上では、奥壁の途中に石棚と呼ばれる大石を据えた最古の例であり、これと石屋形との併設例としては唯一無二で、横口部に小窓を設けている点もまた、特筆に値する。

黒の使用例が限定されていることは既に述べたとおりだが、意味不明の双脚輪状文も、確実な例としては、後述するVの広川町・弘化谷古墳と、熊本県・釜尾古墳と同様に古墳を含めた計四例に過ぎない。脚が下方につき、より複雑な形をとる王塚例が、他の三例に先行したものか。



図1 竹原古墳の入口から見た前室および奥壁の壁画  
(森貢次郎氏「図説竹原壁画古墳」より)

一方、石屋形は肥後から導入されたものであるが、石硼の系譜は不明。小窓の目的は不明であるが、肥後では山鹿市・馬塚古墳、県下では八女市・乗場古墳、同童男山古墳など少數例があり、童男山以外はいずれも装飾古墳。

ともあれ、交通の要衝に位置するという地の利に恵まれながらも、先行あるいは後続する装飾古墳が未確認であるため、馬塚は各地に雄飛した一代(限り)の英傑の奥津城とみられ、何とも“川筋”的ではある。

赤と黒の二色で描かれた若宮町・竹原古墳の壁画は、図像のわり易さでは群を抜く。また、後室奥壁の壁画は、入口からの視

野ギリギリの一・二m四方に納められているなど、その構成力は非凡(図1)。その画題は、竜の子種を授かって駿馬を得るという大陸の童媒説話に求める金闇鬼説は魅力的であるが、描き手は、あくまで、少ない伝聞情報を基に想像力を懸命にかきたてたであろう在地の画工と考えられる。ともあれ、白虎を除く四神をも含むという構成は、他に例を見ず、まさに空前絶後。

新発見の同・損ケ熊古墳の壁画は、赤で格子状の縦・横線と斜線とを引くもので、馬塚や竹原古墳あるいは前出・川島古墳にみられた部厚い石棚もなく、ランクは一つ下か。

### III. 周防灘沿岸(現北九州市東半・行橋市・豊前市・京都郡・築上郡)

南北に長い当地域のうち、装飾古墳は、北端と南端とにのみ分布し、中央部にあたつて県下でも有数な前方後円墳密集地帯でもある京都平野では皆無である点が、先ず、注目される。

古墳時代の京都平野は、前方部に向かって開口する古式(五世紀)横穴式石室に肥後系の石障(割石積)とする石室の周壁に沿って更に内側に板石を立てめぐらし、その内部の床面を二・四区にして切ったものを導入した刈田町・御所山古墳(非装飾)は例外的存在であり、概して、当平野は、九州各地域とは没交渉的であったかにさえ、見える。反面、県下では珍しく、巨石墳や終末期古墳と初期寺院とが時間的連続性をもって展開している。つまり、京都平野の古墳文化には強い中央指向性が読み取れるのであり、これと九州らしさの証明ともいえる装飾古墳が導入されなかつたことは無関係ではなく、むしろ、表裏をなしている、といえよ

北端の北九州市小倉北区・日明一・本松塚古墳では、赤で「米」字形に条線を引いており、類例が乏しいが、前出IIの損ヶ熊古墳に通ずるものがある。

南端の豊前市・穴ヶ葉山古墳群では、木の葉他を刻んでおり、

技法・図文共に県下では異例の存在。

最南端の大平村・百留横穴群では、墓室内部に線刻するIIの地域の横穴例とは異なり、開（入）口部外周に彩色するのが特色である。系譜的には、県境の山国川を東に越えた大分県宇佐平野の影響下にあると見て良い。ただし、宇佐平野の諸例のように開口部外周を、特に左右両側を外側に広げるなど時には数段にもわたる飾り縁状に仕上げた例ではなく、山国川以東とは一線を画そっとしたことが自ずと知られる。

IV・筑後川中流域（現久留米市、甘木市、小郡市、朝倉郡、二井郡、浮羽郡）

当地域は、発生地でこそないものの、技法・図像・構成をはじめ実に多種・多様な壁画が展開・盛行しており、しかも、数基で一群をなす例をも含めて県下では最多の二十七基以上が確認され、かつ、他地域への影響力の大きさをも考え合わせると、全国的にみても、熊本県の菊池川流域と並び称せられる装飾古墳の中核地として位置づけられる。

特に、筑後川の南岸、浮羽町から久留米市東部にかけて東西に走る耳納連山北麓部一帯は、まさに装飾古墳の宝庫となっている。対照的に、北岸では散発的にしか存在しない。ただし、以上の諸

例はいずれも六世紀前半以降に限られる。

一方、五世紀後半～六世紀初頭の古式例は、Vの八女丘陵に北接する久留米市西南部にのみ偏在するが、逆に、ここでは六世紀前半以降の新しい例は知られていない。つまり、中枢は、六世紀になると明らかに東へ移動している。

直弧文他を妻（短側辺・側面）入りの横口式石棺に線刻する久留米市・浦山古墳は、五世紀後半代と当地域では最も古い装飾古墳である。ただし、浮彫ではなく、かつ、文様を表現する場所が棺身内面を中心とする点が、後述するVの広川町・石人山古墳よりも新しい要素といえる。

久留米市・日輪寺古墳では、県下では例外的にしか設置されていない肥後系の石障に、鍵手文他を刻む。線刻し、赤く塗る点で上記浦山古墳と共通するが、直弧文は姿を消しているので、稍新しい六世紀初頭か。なお、この石室は大破しているが、平面形は長方形の可能性があり、だとすれば、方形プランを原則とする肥後タイプとは一線が画されることになる。

吉井町・日岡古墳は、県下における彩色表現をとる最古の例として注目される。もともと、赤以外の色をも用いる技法は、熊本県下での線刻した直弧文他の幾何学文の内部を塗り分けた例が先行する。直弧文は姿を消している点で本墳は明らかに肥後の諸例に後出するものの、その横穴式石室は、单室で、しかも、くびれ部に向かって開口しているので、六世紀前半代を考えてよい。また、日岡古墳では、赤・白・緑・青と色数が多い点と、横口部天井石をも含めた周壁のほぼ全面にわたって各種の図文が描かれている点とが特徴といえる。



なお、文様上では、奥壁に描かれた太陽を思わせる大型同心円文は、筑後川を廻って大分県の日田・玖珠両盆地に、さらには宇佐平野にも達したことが注目される。ただし、本墳を初出例とする歴史文はあくまで福岡県バージョンであり、熊本県下に限定される紐付同心円文と好一対をなす。

同じく、吉井町にあって、互いに数十mとは離れていない珍敷塚・原・鳥船塚の三基の装飾古墳では、矢筒(双)か鳥船のいずれかが主文様となっており、三角文はなく同心円文もさほど目立たず、明らかに前出日岡古墳とは一味異なる。つまり、全体として、同工異曲、大同小異との評価もあるが、先人達がソックリを嫌い、お隣りとの違いを出すことによいかに腐心したかが偲ばれるのである。

なお、珍敷塚古墳のヒキガエルは、これを月の象徴とする大陸系要素の片鱗と見做されているが、太陽(同心円文)と月と鳥船とで構成・象徴された先人の生と死の世界観の全体像は、未だ読み解かれてはいない。

郡の東端に位置する浮羽町・重定古墳の石室は、後円部側面に開口する県下でも屈指の超大型の複室で、しかも、厚さ七十cmもの石棚を架け渡す。墓室構造上でも明らかに前出日岡古墳よりも後出するにもかかわらず、図文の表現範囲は日岡古墳と同様に広い古様をとどめるのが特色。つまり、この時期(六世紀後半代)では、通常、概ね入口(外側)から見える部分にのみと、図文を施す範囲が限定される傾向にあるにもかかわらず、重定古墳では、前室の少し手前から奥(内側)一面の壁(除天井)に、赤と青とで各種の図文を描いている。

文様の個々では、矢筒と同心円文とが目立つが、三角文は見当たらない。また、奥壁の全体像は、はつきりとはしないものの、数段にわたって中心飾の蕨子文の左右に矢筒を並置させたともみられており、だとすれば、後述するVの丸山塚古墳の構成と共通するものがあることになる。

なお、当地域東半部に擅る有力豪族的(生葉)君の奥津城は、五世紀代では長持形石棺+甲冑(よろい・かぶと)八組他という極めて纖内色が強い吉井町・月岡古墳が目立つが、六世紀代では上記のように、壁画を導入するなど在地色を全面に押し出すようになり、時期的な変化がある点が注意をひく。

また、的君系の装飾古墳は、概ね同心円文を多用する傾向が目立ち、後述するVの八女丘陵とも異なる独自の展開を見せていく。

#### V、八女地方と有明海沿岸(現八女市・筑後市・大川市・柳川市・大牟田市・八女郡・三瀬郡・山門郡)

当地域での装飾古墳の分布は、北半部の矢部川流域の八女丘陵と、南半部にあたる有明海沿岸とに二分される。

さて高くはないものの東西に走る八女丘陵は、天然の防禦線であると共に、約七kmの間に消滅した例をも含めて計十二基もの前方後円墳が集中しており、九州を代表する豪族として名高くなつ、繼体紀二十一年条(五一七)に反乱伝承を持つ筑紫君一族累代の兆(墓)域と目されている。したがって、九州最古の装飾古墳が同丘陵西端部に出現したこと自体が、その歴史的背景の一端を物語っているといえよう。

最古の装飾古墳は、五世紀の中頃、広川町・石人山古墳におい

て、もともとは畿内系である家を模した石棺の身の短側辺（妻）に、九州で独自に横口を設けた（妻入りの横口式家形）石棺の蓋の表面を中心に（内部には無し）直弧文他の幾何学文を浮き彫りにすることで始まった。

ただし、直弧文他の石棺に刻む風習は、以後、八女丘陵内部ではなく、北上してIVの久留米市西南部や、南下して熊本県下へと波及・展開した点は、注意を要する。

八女市・岩戸山古墳は、多数の石人・石馬を巡らした北部九州最大の前方後円墳で、筑紫君磐井の墳墓とみてよい。石室は未調査であるが、直弧文を刻んだ石製品が存在するので、筆者としては当然、直弧文他が刻まれたもの、そしてその最後の例ではないかと考えている。生前に作った墓である寿墓とされており、だとすればその時期は、六世紀初めと考えてよい。

磐井の子・葛子の墳墓と目される同・乗場古墳では、直弧文は消え、円・三角文が目立つ。

六世紀中頃の広川町・弘化谷古墳では、肥後系の石屋形に矢筒や双脚輪状文（脚は右側面につく）・三角文他を、一部線刻を併用して赤と緑の二色で塗り分けているが、当丘陵では孤立的存在。

これに続く時期の同市・丸山塚古墳は、蕨手文を主文様とする点で前出IVの重定古墳と共に通するものがあるが、反面、三角文が目立ちながらも同心円文が描かれないと対照的である。

八女丘陵は、最古の装飾古墳は存在するものの、以後、他地域に大きな影響を与えた、あるいは、リードした形跡は、文様、技法ともに意外な程に顕著ではない、というのが最大の特色か。数も十基に満たず、案外にすくない。

一方、南半部にあたる有明海沿岸部の大牟田市・萩ノ尾古墳の石室は、石棚や平面形他の構造上、熊本県・弁慶ヶ穴古墳と似通う。

同市・倉永古墳では、浅く彫りくぼめた円（環状）文が目立つが、同様例は、IVの浮羽郡や大分県の日田盆地、佐賀県にも若干知られている。

### 3 福岡県の装飾古墳の特色

以上からみて、県下の装飾古墳の特色は、以下のとおりに要約される。

#### 古墳の外形

・横穴の占める比率が小さく、百十基以上と過半を越える熊本県下とは対照的である。

#### 技法

・もともと刻みつける文様である直弧文他の段階（五世紀）はともかく、以後は、彩色が主流である。  
・黒の使用例が少数あるが、目下の所は、福岡・佐賀・大分県下に限られる。

#### 文様

・直弧文は五世紀を代表する文様であり、岩戸山古墳（六世紀初頭）以後は姿を消す。  
・蕨手文は、福岡県の文様であり、日岡古墳が初出例である。  
・石棺の蓋の表面→棺身の内部→石室内的略全面→石室内的局所（奥壁他）へと、概ね、時代が新しくなるにつれて限定される傾

向がある。

#### 4 おわりに

装飾古墳に見られる他地域との交流・直弧文を石棺に彫刻する風習は、八女丘陵から南下して肥後に導入された。・赤以外の色をも用いての塗り分けは、肥後の地でおこり、北上して日岡古墳に導入された。

・県下の石屋形・石障は、系譜的に肥後に連なる。

・双脚輪状文では、王塚古墳例が、他の三例に先行するのではないか。

要するに、九州における装飾古墳にみられる交流の起点と方向とは、時に南下し、時に北上するといった具合に、その時々の諸情勢を敏感に反映して多様であり、かつ、各地の装飾古墳は、たとえ微妙な差ではあっても似て非である、あるいは、非であろうとしたもの、と評価できる。

つまり、特定の地域が他の大部分の地域を圧倒し席捲したのではない。九州の諸豪族は、各々の独自性を保持しながらも、中央政権の動向を注視し、かつ、地域社会内部での主導的位置を確保せんとして対立と連合とを繰り返しつつ鎧を削ったのであり、彼らの奥津城である装飾古墳からもそうした動向の一斑を読み取ることができる。

その意味において、「筑紫王国」とか「磐井政権」といった表現は適切ではなく、諸豪族の交流圏（含通婚圏）は意外に広いものの、彼らの勢力（支配）圏は、概ね旧国単位をこえることはなかった、といえよう。

六世紀の頃、墓室の内外に壁画を表現するという新しい風習や情報に接した時、列島での先人の対応は、導入を拒否した畿内をはじめとする大部分の地域と、各々に小規模の変容を加えながらも取り込んだ九州など一部地域とに、二分された。

とりわけ、九州では、單なる風習の差ではなく、中央政権とは一定の距離を保つというスタンスを示し、九州らしさの証明、志を同じくするものの連帯の証としての意味をも強くもった、と考えられる。

つまるところ、列島にあっては、今來の文物の導入・受容に際しては、無条件ではなく、終始、内的条件を基に各地域で主体的な選択と変容がおこなわれてるのであり、その差・違いは、優劣ではなく、各々の地域の特色・らしさの発露として評価すべきものであろう。



北部九州(福岡県)の装飾古墳研究一題

福岡大学文学部教授

小田富士雄

1  
北部九州の裝飾古墳研究史

—福岡県における自伝風研究史—

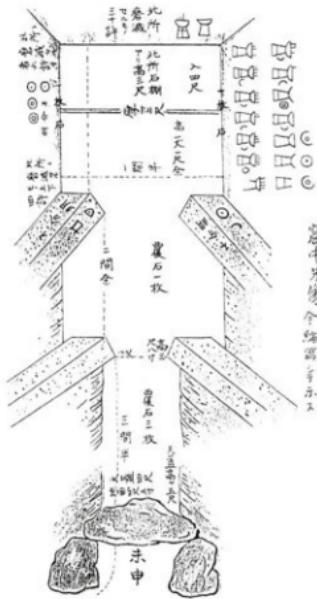
2 大陸系画題の検討

1 北部九州の装飾古墳研究

—福岡県における自伝風研究史—

古墳文化のなかで、装飾古墳への関心は九州では特に江戸時代にさかのぼって認められる。装飾古墳の出現が五世紀中頃までさかのぼり、六世紀を通じて盛行した福岡県南部から熊本県までは、江戸時代から地誌編纂の行われるなかで古墳壁画が紹介されてい

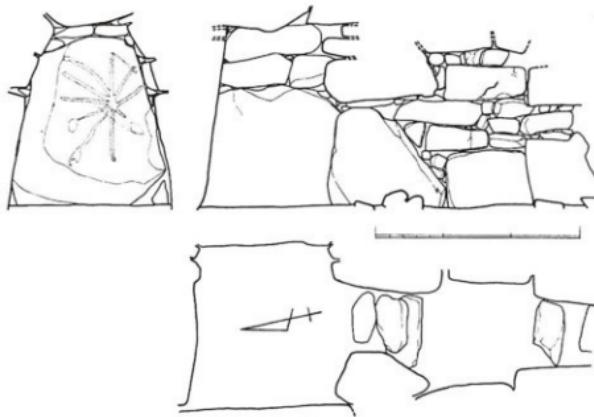
なかでも、久留米藩士の学者矢野一貞は「筑後將上軍談」(嘉永六年一八五三)のなかで浮羽郡(旧上宮田村)・重定古墳、八女郡一条・石人山古墳、熊本県山鹿市(旧鍋田村)・鍋田横穴などを紹介している。重定古墳の石室に朱書きされた収図について、は、「上古ノ文字」とする俗説を退け、「是文字ニ非ズ、即上古墳輪ノ器也、吉田村ニ存スル處ノ石人ニ、背後筒ヲ負者アリ、赤象ト甚夕相似タリ、赤象ハ創其背ヲ模ス、蓋外禦ノ意カ」と、八女市吉田・岩戸山古墳の石製品との比較から正鶴を射たる考証がなされている。筆者は、一九六〇年頃、古賀寿君の導きで一貞関係資料



第1図 「筑後将士軍談」に収録された筑後・重定古墳の図

料の調査にたずさわったことがあり、平田篤胤が重定古墳の叢書を写して神代文字と説明している資料に出会った。平田神道唱導の一資料として利用されたのであるう。

明治以降、九州の装飾古墳についての権威ある学術書としては京都大学考古学研究報告として公刊されていた「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」（一九一七年）・「九州に於ける装飾ある古墳」（一九一九年）『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』（一九四〇年）が研究の水準を示すものとして久しく利用され、筆者もその恩恵を受けてきた。

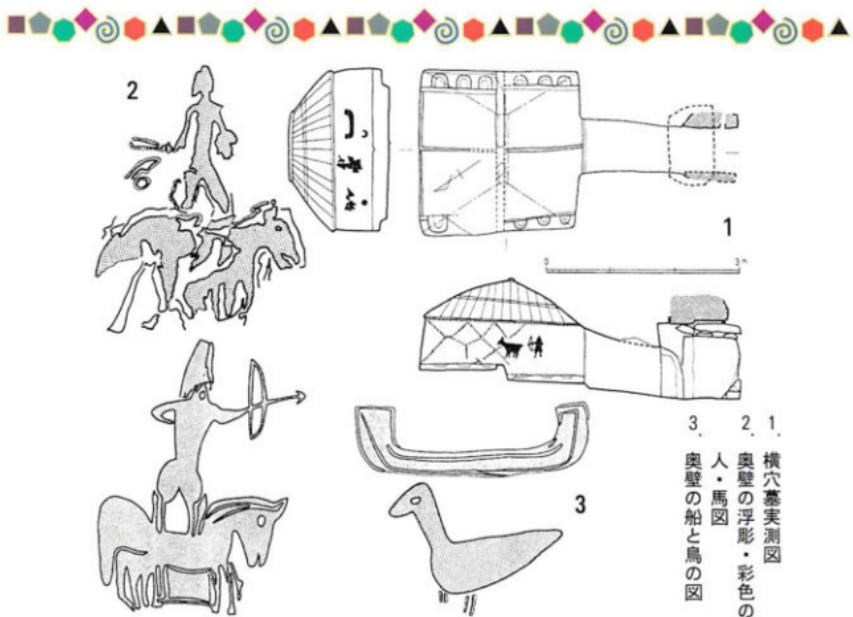


第2図 北九州市・日明一本松塚石室実測図（註1文献による）

墳<sup>1</sup>の調査で始めて装飾古墳にたずさわった。六世紀末の横穴式石室の奥壁に朱線で放射状線を描いている。さらに、同年九州考古学会が主催した浮羽郡の遺跡見学会に参加して、同年発見された浮羽郡吉井町・珍敷塚古墳の鮮明なる彩色壁画に衝撃的な感動を受けた。故田中幸夫氏の名解説と共に忘れ得ぬ思い出である。また一九四七年に発見された筑紫野市・五郎山古墳の壁画に見る船とあわせて、南方系のゴンドラ型が注目され、船の船先にとまる鳥岡に天の鳥船伝説、また蠍蜍（蝦蟇蛙）図に大陸系の月象系譜が指摘されるなど、当時慶應大学で東南アジアの民族学、考古学の研究で知られた松本信広氏による現地調査の所見が新聞に発表された。この頃、朝日新聞などに森貞次郎氏による福岡県下の装飾古墳の紹介が連載されて、当時県下の各高校クラブで活躍していた“考古学ボーイ”たちに新鮮な知識と少なからざる影響を与えたものであった。

一九五三年九州大学に進学した筆者は渡辺正氣氏に従って、この年発見された朝倉町・狐塚古墳<sup>2</sup>の調査に参加した。松岡史君と共に夏休みの約一ヶ月に及ぶ調査であった。壁画は横穴式石室の後室奥壁と左右両壁、左袖石などに線刻で船・人物・動物・樹木などが刻まれていた。筆者にとっては始めての本格的な装飾古墳の調査であり、多くの副葬品と共にその後の筆者の装飾古墳調査にも重要な経験となつた。

遠賀川流域では嘉穂郡桂川町・玉塚古墳が装飾古墳の白眉であり、九州考古学会の見学会で強烈な印象を持っていた。また、故名和半一郎氏の導きで、鞍手町・古月横穴や中間市・羅漢山横穴などの線刻画などの見学を果たして、この地域にも関心を持つに



第3図 中間市・瀬戸14号横穴と装飾壁画（註3文献による）

至ったが、一九五六年中間市・瀬戸14号横穴の壁画が採土工事によって発見されたのに直接かかわることとなった。マイド点火の爆破直前、地元の船津常人、黒野肇兩氏と三日三晩にわたって横穴内にこもって爆破を阻止し、その間再三県教育委員会に連絡をとったが返事を得られぬまま、工事側との約束期限も切れて応急調査をしたもの、保存に至らなかつた惜しい古墳であった。三方壁面に浮彫技法で人物・動物・船などを描き象面を朱彩する。中央には馬上に立ち射弓の構えをする武人・狩獵図・朱線格子文などこの地域では珍しい横穴壁画であった。

敗戦後の十年間に中学校から大学への学生時代を過ごすなかで、筆者の装飾古墳へのかかわりは、その総説的知識の必要性を痛感するに至った。その頃発刊された齊藤忠氏の「装飾古墳の研究」（一九五二年吉川弘文館刊）は戦前の日本・朝鮮・中国にわたる装飾古墳を総覧したもので、以後の研究の出発点ともなるすぐれた著作であった。本書によって大陸にまで及ぶ研究の指針が示されたことは、当時の筆者の渴きを一応叶えるものではあったが、当時の出版事情では壁画の写真・実測図・拓影などはほとんど掲載できず、具体的な認識を得るには靴下搔痒の感を如何ともしなかった。

一九五七年鞍手郡若宮町・竹原古墳<sup>14</sup>の発見は竜馬・四神などとかかわる大陸系文題との交渉を示す画題と、赤・黒2色で描かれた卓抜な画法などで考古学のみならず、美術界からの注目を集め、いわゆる「原始絵画」ブームを起こすこととなつた。装飾古墳探訪者が激増し、これを助長するかのように小林行雄編『装飾古墳』（一九六四年平凡社刊）、齐藤忠編『古墳壁画』（日本原

始美術』6・一九六五年講談社刊)などが豊富なカラー図版と共に公刊された。前者は石室の構造と壁画の関係、石棺系・石障系・壁画系・横穴系の壁画分類と編年などに新機軸が打ち出されて筆者らは大きな影響を受けた。また、後者はその作成段階で、森貞次郎氏を代表とする福岡県下の石室と壁画の実測調査が実施されてその成果が収録されている。筆者は久留米市・日輪寺古墳、浮羽郡吉井町・日ノ岡古墳、浮羽町・重定古墳、同・楠名古墳を担当した。

一方、装飾古墳ブームの到来は無対策のままに放置されている多くの装飾古墳の実態をも明らかにすることとなつた。一九七〇年一月、文化庁では東京国立文化財研究所、九州大学農学部・工学部、地元考古学関係者らによる装飾古墳保存対策研究会を発足させた。当時九州大学助手であった筆者も委員に加えられた。特対象として諸方面から研究が実施された。これより先、福岡県の依頼で一九六五年二月に前室上に建てられていた管理室を撤去するにあたり、コンクリート貼りの床を破って羨道部を探索調査することとなつた。わずか三日間であつたが、前室の閉塞石の外側、さらに一・五mほどまで前室南壁が延びて、明瞭な羨道は形成されず、前庭部を構成していた初期横穴式石室の構造となり、前室は前方に閉塞石を積んで区画することによって前室機能を構成していることが明らかになつた。内部からみた閉塞壁は比較的整っていた。このような仕事は、石室内部からしか出来ないことになる。そこでさらに閉塞壁面を注意してみると、中央の中ほどより上方に丁度一人が這い出せるくらいの広さの閉塞石の間に

に凹凸の目立つ部分がある。おそらくこの部分が閉塞作業の最後に外側から石墳めされたであろうと考えると納得できたのであつた。さらに、後年保存整備調査委員会で前庭部の全面的発掘調査が行われ、左壁はさらに倍近い長さであることも明らかにされた。

北部九州の装飾古墳保存への関心は、文化庁の委嘱を受けて壁画模写作業に従事されていた日下八光氏が『装飾古墳』(一九六七年朝日新聞社刊)を発刊して日本画手法による記録保存の成果をしめされた。また、一九七三年四月には榎見弘氏らによって装飾古墳を守る会が結成され、民間の人々による地味な保存運動が展開された。同会では一九七四年に『装飾古墳白書・福岡県下における保存の現状』、一九七八年に『同・熊本県下における保存の現状』を刊行した。

一九七一年、筆者は、北部九州の巨石古墳石室実測作業の一環で築上郡大平村・穴ヶ葉山一号墳の調査を行つた。一九二八年発見の本古墳は木葉・鳥の線刻で有名になつたが、今回の調査によつてさらに人物・飛翔鳥・魚・旗などの線刻が知られた。筆者は、木葉文に香川・鳥取県方面との類例をたどり、また旗幟とそれとともに鳥図から、当方が渡来系文化とかかわりが深い点と合わせて半島系鳥杆祭儀の導入を推測した。本古墳は本年度整備事業が完成するはこひとなつたことは喜ばしい。

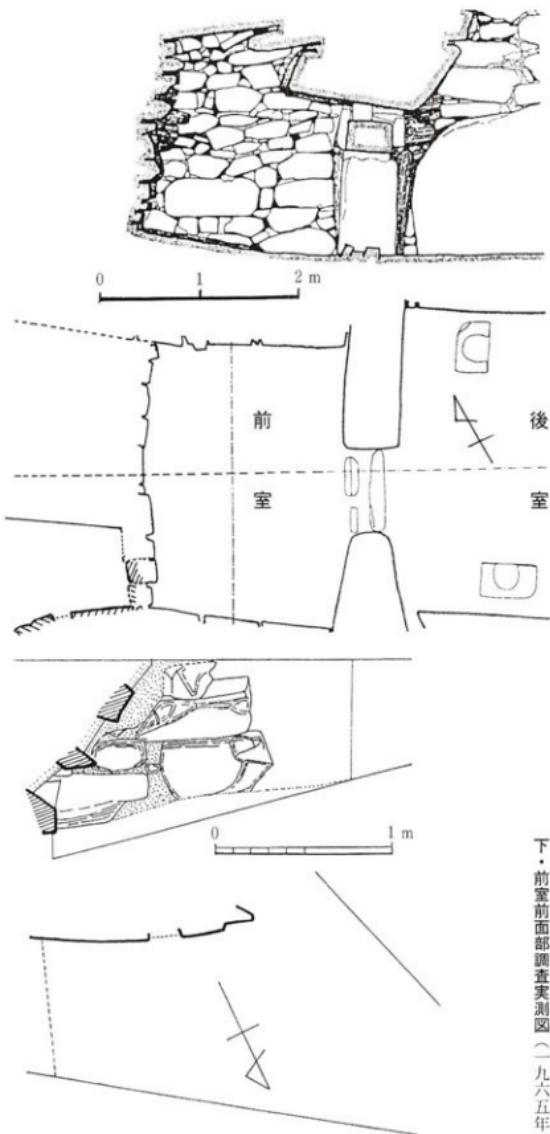
装飾古墳の保存整備事業は近年各地で教育委員会が主体となつて進められ、筆者もそれらに関与することが多くなつた。今まである。穴ヶ葉山一号墳のみならず飯塚市・川島古墳・筑紫野市・五郎山古墳は現在進行中であり、桂川町・王塚装飾古墳資料館はす

でに開館して多くの見学者が訪れている。  
筑紫野市・五郎山古墳は一九四八年に故小林行雄氏らの調査があつたが、一九九三年から整備基本計画策定委員会が発足している。その基本的資料収集作業の一環として、一九九四年から三ヶ

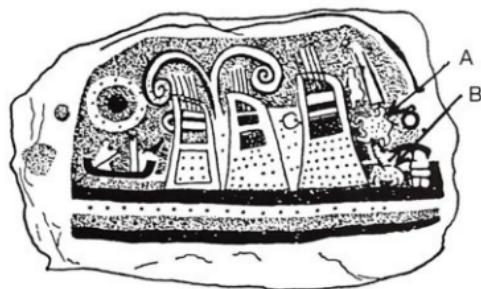
年計画で筆者ら福岡大学考古学研究室では委嘱を受けて埴丘・石室・壁画の調査を実施して多くの成果をあげた。それに拠つて一九九七年度から整備事業は新しい段階を迎えるに至った。

第4図 桂川町王塚古墳前室前面部の調査

上・前室平面図・側面図（京大報告書に加筆）  
下・前室前面部調査実測図（一九六五年一月作成）

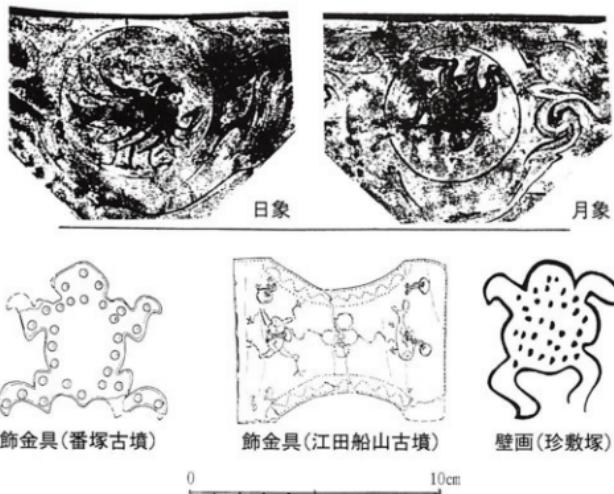


## 大陸系画題の検討



第5図 珍敷塚古墳奥壁の壁画と蟾蜍図  
 (A・蟾蜍俯瞰図、B・同正面図)  
 (森貞次郎『装飾古墳』1985年による)

福岡県下の装飾古墳の中で注目されているものに朝鮮半島に源流の求められる壁画がある。これまで多くの研究者が指摘しているように、浮羽郡吉井町・珍敷塚の蟾蜍図、鞍手郡若宮町・竹原は。古墳の四神図などの彩色画はまず異論はないところである。蟾蜍図は高句麗壁画古墳に月象としてしばしば描かれている。そのほとんどが手足を左右に広げた俯瞰図である。珍敷塚古墳の蟾蜍は奥壁の右端なかほどに右向きの俯瞰形が描かれている。赤



第6図 高句麗古墳壁画の日・月象(上)と  
 日本の蟾蜍(『番塚古墳』ほかによる)

色による輪郭と背上にいくつもの朱点を加えてよく特長をとらえている。さらにその下にも正面観図が描かれているのが注意を引く。正面図は高句麗壁画にも見あたらず、本図を描いた人は蟻蟻蛙であることを認識し、本図の全体構図が左端に太陽と、その下



に船先にとまる鳥を先導として右方に漕ぎゆく船とあわせ見て、  
蟾蜍図が黄泉図を示す死者の到達点であることを意味する冥界観  
を取り入れたのである。我が国に現われる蟾蜍図には熊本県菊  
水町・江田船山古墳の飾金具。<sup>(五世紀後半)</sup>や福岡県苅田町・  
番塚古墳の棺飾金具。<sup>(六世紀初)</sup>がある。前者は金銅金具に打  
ち出されたもので花文の左右に魚文と対して、月象と断ずること  
はできないが、後者は二個の木棺小目の飾金具として同形のも  
のの三個が発見され、裏面に横方向の木月が付着していて、鋲留さ  
れていたことが知られる。死者の納棺にとりつけられた点からも  
月象として冥界にかかる意味を持つものもあったと考えられ  
る。韓国でも腰佩・刀装具・馬具などの装飾に蟾蜍が採用されて  
いて、同時代の我が国独自の現象ではない。しかし、月象として  
の三足鳥は韓国や日本にはみられず、高句麗から南伝する段階で  
欠落したものであろう。同様な現象は竹原古墳の四神図でも指摘  
することができる。この石室に描かれた画題は、故金闇丈夫氏が  
「水辺に馬を牽き龍種を求める」古代中国の龍媒伝説に求める解  
釋<sup>○</sup>を示して以来つとに有名になつた壁画である。さらにその前  
室から奥室に通ずる両袖正面に描かれた壁画は、保存状態が明  
瞭でない点が多いものの、その特長から左を玄武、右を朱雀とみ  
る解説も有力である。我が国における明確な四神図は、さらにお  
くれて七世紀末ごろの奈良県明日香村・高松塚古墳まで待たなけ  
ればならない。竹原古墳の玄武（北）・朱雀（南）図は描かれた  
位置も南面する西と東に對してある。奥壁の絵画についての  
金闇説は多くの支持を得たが、一方では異説も出されている。齊  
藤忠氏は牽馬人物の上方に描かれた怪獣を前室の四神図を考慮し



第7図 竹原古墳前室からみた前室と奥壁の壁画  
(森貞次郎『装飾古墳』1985年による)

て、そこに不足している青龍（東）または白虎（西）、あるいは  
兩者合体させた日本の表現とみる。また、牽馬人物図も中国・高  
句麗の壁画図にたどり、墓主を乗せて「天空を走つて天界に昇つ  
ていく進行の状態を示しているもの」とする。

また、下端の大型の波形文を蕨手文（唐草文の変形）に、三角  
形の連続文を通有の連続二角文にあてて、先行する壁画古墳にお  
ける伝統的な三角文と蕨手文と船と見る。これに大陸的な國文  
(怪獣・牽馬人物)を「錯雜させたもの」で、このような技法は  
「日本の古墳壁画の特色でもある」と解説している。齊藤説で示



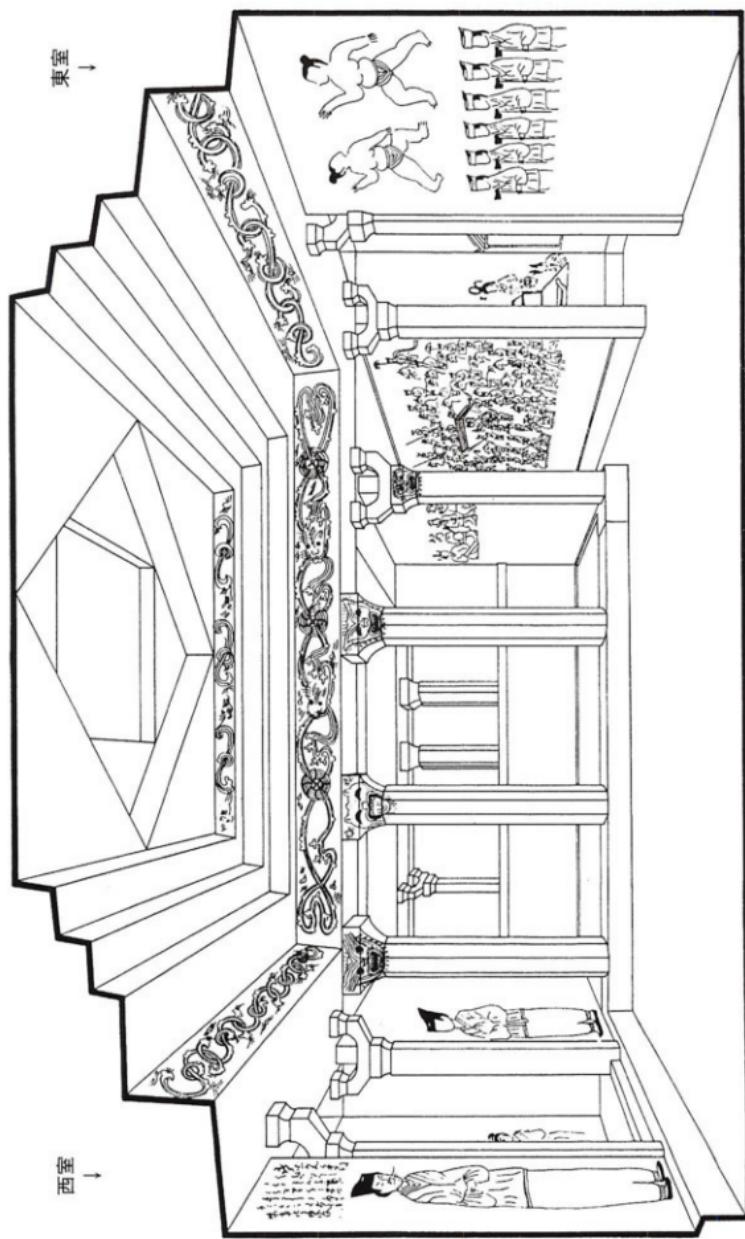
された牽馬人物図を、古代中国で死者の靈魂が不死の理想世界（崑崙山）に昇る昇仙図<sup>1</sup>とみる見方には東潮氏も同調しているが、上方の怪獣（龍）を天馬にして、「地上から天上への垂直動作を平面的に表現したもの」で「地上の牽馬像に対する天界の馬（天馬）」である」と解説する。また四神図に関しては朱雀は明白であるが、玄武は不明とし、白虎もないので四神図とはみられないとする<sup>2</sup>。さらに本古墳の調査者森貞次郎氏は怪獣について、馬の姿態に最もよく似ているが、「棘のある鞭状の尾、赤く長い舌、大きな鉤爪、全身の棘」などは龍の持つ属性であり、「龍の表現についての経験の乏しいため、図像としてではなく、観念的に知り得た特長を、自ら描き慣れた馬を基として表現する結果になつたと考えられないでもない」と解説する。

また、中国の裝飾墓を研究した町田章氏は、珍敷塚や竹原古墳にみる蟾蜍・月・怪獣・龍とみて「大陸的な死生觀が入り込んでいるとみることも可能かもしれないが、しかしその表現と中國系の裝飾墓には程遠いものがあり、まったく別の死生觀にもとづくものとみるべきである」として大陸系思想の導入に否定的である<sup>3</sup>。怪獣を青龍と白虎の合体とみる齊藤説は、前室の朱雀・玄武を認めることによって青龍・白虎も存在する筈であるという完全思考方式が先行している。珍敷塚古墳でも月象は描かれているが、日象は太陽そのものを描いて三足鳥<sup>4</sup>は導入されていないことを考えれば、南北方位を重視して東西方位までは及ばなかつたこ<sup>5</sup>とも考えられる。またしばしば指摘されている「日本的表现」という変容の一つに竹原古墳の玄武図にみる黒色梢円形表現が奥壁の駆<sup>6</sup>のそれに近いことも注意されてくる。また、町田説も中国の

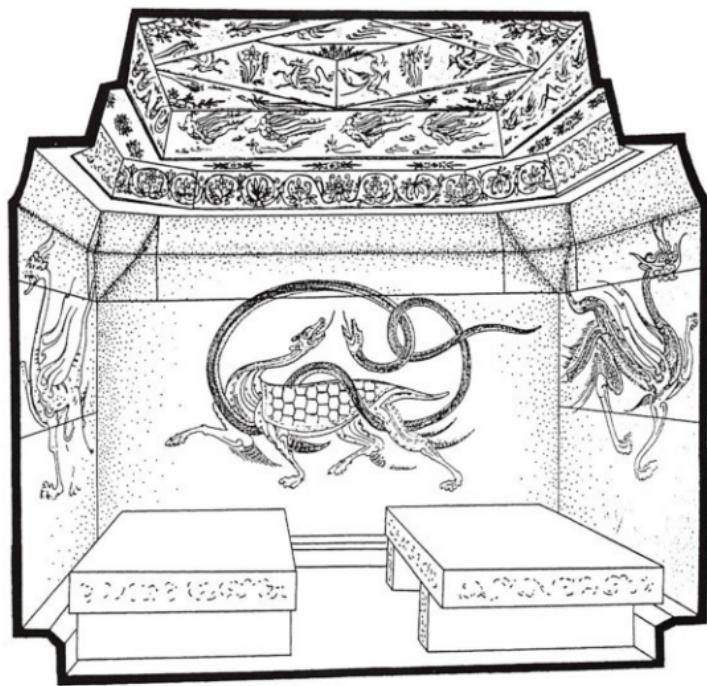
裝飾墓に近似した表現でなければ大陸系思想の導入とは認められないとする、当時のわが国の文化レベルを配慮しない厳しさを求める思考のようである。東説も朱雀図は認定するが、玄武図を否定し、怪獣は龍・天馬という単純に昇仙思想図で処理される。齊藤説は四神と昇仙の思想で説明するために、波形文（蕨手文）・連続三角文・船を壁画古墳に伝統的にみられる圖形を加えたにすぎないとせざるをえなかつた面がある。奥壁の画題の左右を神圣性を意味する翳で囲むというわが国装飾古墳に例のない表現方法は、この画題自体をまとめて一帯の叙事画と見るべきことを意味しているのではあるまい。その立場からは各図文を網羅して一元的に説明できる名馬誕生伝説で解釋する金闇説は優利であろう。しかし昇仙説をとつても齊藤説でいうように「伝統的図文」として切り捨てる必要はないと思われる。その意味では東説の昇仙説はまだすべての図文をとり入れた解説がなされているようである。

珍敷塚古墳や竹原古墳の壁画は、守護と辟邪の意味をこめた呪術性のつよい伝統的思想を表現する図文に、新しい大陸系思想を部分的ながら月象・四神・龍媒・昇仙などを複合的に導入している実態を示しているとみられよう。

筆者は一九九二年九月、朝日新聞社セスナ機で北朝鮮に飛び、安岳<sup>7</sup>二号墳<sup>8</sup>や江西大墓<sup>9</sup>を実見する機会に恵まれた<sup>10</sup>。前者は地下宮殿ともいすべき中国系の横穴式多室墓で永和十三年（三五七A・D 東晋年号）墨書紀年銘をもつ有名な人物風俗図墓であり、朝鮮半島最古の装飾墓でもある。その天井に描かれた日月図には三足



第8図 北朝鮮・安岳3号墳石室内見透視図(『朝鮮遺跡遺物文庫』5による)



第9図 北朝鮮・江西大墓石室内の構造と壁画  
正面・玄武、右・青龍、左・白虎（『朝鮮遺跡遺物図鑑』6による）

鳥も蟾蜍も描かれていない。本来描かれていたが  
のちに消えたという説はとり難いと思われる。朱  
栄憲氏<sup>6</sup>の云うように、四世紀末頃から現れる  
みてよいであろう。

また、西室に墓主夫妻が精彩な筆致で描かれて  
いるが、七世紀初前後の江西大墓では高句麗式の  
平行・三角持送り天井單室構造の四壁には四神図  
のみが大きく描かれていて墓主は姿を消してしま  
う。この古墳の天井部に描かれた多くの画題とそ  
の思想内容については李内寿氏のすぐれた論考が  
ある<sup>7</sup>。

四神が画題の中心を占めるようになるのは六世  
紀後半からとされており<sup>8</sup>、百濟公州時代の王陵  
である宋山里六号墳<sup>9</sup>に受容された。さらに北部  
九州にまで到達したのである。齊藤忠氏は高句麗  
が六世紀後半頃から国情の緊張したことが、外敵  
から自衛する必要に迫られ「伝統としての壁画に、  
呪的に外部の一切の邪惡の侵入を防ぐ四神が、そ  
の中心として採用されたのは、遺族や近親者のこ  
のような願望のため」であろうかと推測してい  
る<sup>10</sup>。

数少ないわが國の大陸系画題を導入した裝飾古  
墳の究明には、日本側と大陸側それぞれの社會と  
思想への理解が今後とも必要である。

- (1) 小田富士雄「日明・一本松塚古墳調査報告」(福岡県立小倉高等学校創立八十周年記念「まがたま」)一九八八年
- (2) 渡辺正氣・古賀精里「筑前朝倉郡孤塚古墳」(福岡県文化財調査報告書第十七編)一九五四年
- (3) 小田富士雄「福岡県瀬戸装飾横穴調査概報」(史淵)七十四編)一九五七年・小田ほか『中間市史』上巻一九七八年
- (4) 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」(美術研究)百九十四号)一九五七年・「竹原古墳」一九六八年
- (5) 福岡県教育委員会編「特別史跡王塚古墳の保存―装飾古墳保存対策研究報告書」一九七五年
- (6) 桂川町教育委員会「国指定特別史跡王塚古墳―発掘調査及び保存整備報告」(桂川町文化財調査報告書第十三集)一九九四年
- (7) 小田富士雄「穴ヶ葉山1号古墳」(穴ヶ葉山古墳群)大平村文化財調査報告書第三集)一九八五年
- (8) 筑紫野市教育委員会「五郎山古墳―第一次発掘中間報告」(筑紫野市文化財報告書第四十六集)一九九六年
- (9) 本村豪章「古墳時代の基礎的研究稿―資料編(II)」(東京国立博物館紀要)第二十六号)一九九一年
- 卯 金関丈夫「竹原古墳奥室の壁画」(MUZEUM二二五号)
- 卯 九州大学文学部考古学研究室「番塚古墳―福岡県京都郡苅田町所在前方後円墳の発掘調査」一九九三年
- 卯 一九六六年、『考古学と古代―発掘から推理する―』一九八二年収録
- (10) 齋藤忠『壁画古墳の系譜』(日本考古学研究二)一九八九年
- (11) 曽布川寛『崑崙山への昇仙―古代中国人が描いた死後の世界』(中公新書)一九八一年
- (12) 東潮「装飾古墳の源流―東アジアの装飾墓」(歴博十周年『装飾古墳の世界』)一九九三年
- (13) 町田章『古代東アジアの装飾墓』一九八七年
- (14) 岡崎敬「安岳第三号墳(冬寿墓)の研究―その壁面と墓誌銘を中心として―」(史淵)第九十三号)一九六四年
- (15) 小田富士雄「朝鮮に日本文化の源流を求めて」上・下(『朝鮮時報』一九九三年三月十一日号・十五日号)
- (16) 朱采憲(永島碑臣慎訳)「高句麗の壁画古墳」一九七二号
- (17) 李丙寿「江西古墳壁画の研究―主として大墓壁画にかかる研究―」(『韓国古代史研究―古代史上の諸問題―』)一九八〇年
- (18) 軽部慈恩『百濟美術』一九四六年
- (19) 小田富士雄「南朝墳墓よりみた百濟・新羅文物の源流」(『九州古代文化の形成』下巻)一九八五年

## エピローグ

もやにかかって見えるこの地域では古く約一五〇〇年前頃に古墳の石室のなかに多彩な色を使い鎮魂の意味を込め、多くの壁画を残している。

この地域は、壁画に円文・同心円文を多く描いている。この文様は一説に的を示しているといわれている。

この地域の支配者と推測される的君のシンボルかもしだい。

このような壁画古墳を作った人々は、さほど大きくなない古墳に、この円文を描くとともに、個性を主張するかのように船・鳥・人・蟾蜍（ガマガエル）などを描いる。このような個性的な地域の盟主とはどんな人物だったのだろうか。



鷹取山山頂から筑紫平野を望む



展示資料目録

.....

120

主要文献目録

.....

121

協力機関及び協力者一覧

.....

122

## 展示資料目録

番号	古墳名	資料名	点数	所蔵者
1	吉武7号墳	模型（10分の1）	1	福岡市立博物館
2	竹原古墳	馬具	1	若宮町教育委員会
3	損ヶ熊古墳	須恵器	1	広川町教育委員会
4	石人山古墳	器台	1	岩塙古墳
5	弘化谷古墳	家形埴輪	1	14号
6	東光寺剣塚古墳	提瓶	1	6号
7	乗場古墳	形象人物埴輪	1	7号
8	岩戸山古墳	朝顔形埴輪	1	8号
9	城腰横穴墓	須恵器	1	9号
10	小田茶臼塚古墳	円筒埴輪	1	10号
11	仙道古墳	人物埴輪頭部	1	11号
12	寺徳古墳	金銅製單翼式柄頭大刀柄頭	1	12号
13	大甕	石鶴	1	13号
14	玉環	石鞍	1	14号
15	耳環	線刻人物（拓本）	1	15号
16	耳環	短甲	1	16号
17	耳環	衝角付胄	1	17号
18	耳環	鐵矛	1	18号
19	耳環	器台	1	19号
20	耳環	大甕	1	20号
21	耳環	石杵	1	21号
22	耳環	提瓶	1	22号
23	耳環	盾持人物埴輪	1	23号
24	耳環	須恵器	1	24号
25	耳環	矢野一貞資料	1	25号
26	寺徳古墳	矢野一貞肖像画	1	26号
27	塚花塚古墳	筑後持上車談	1	27号
28	塚花塚古墳	裝飾全体図（木版）	1	28号
29	重定古墳	矢野一貞文様（木版）	1	29号
30	相坂横穴墓14号	相坂横穴墓15号	1	30号
31	五郎山古墳	相坂横穴墓15号	1	31号
32	穴ヶ莧山古墳群	須恵器	1	32号
33	古月横穴	須恵器	1	33号
34	次郎太郎古墳	須恵器	1	34号
35	沖出古墳	須恵器	1	35号
36	塚堂古墳	耳環	1	36号
37	立山山古墳群8号墳	古写真	1	37号
38	立山山古墳群13号墳	盾形埴輪	1	38号
39	立山山古墳群8号墳	家形埴輪	1	39号
40	立山山古墳群8号墳	武装人物埴輪頭部	1	40号
41	立山山古墳群8号墳	盾持人物埴輪	1	41号
42	立山山古墳群13号墳	埴輪	1	42号
43	立山山古墳群13号墳	須恵器	1	43号
44	立山山古墳群13号墳	須恵器	1	44号
45	立山山古墳群13号墳	須恵器	1	45号
46	立山山古墳群13号墳	須恵器	1	46号
47	立山山古墳群13号墳	須恵器	1	47号
1	田主丸町教育委員会	1	1	1
2	桂川町教育委員会	2	1	1
3	浮羽町教育委員会	2	1	1
4	北九州市教育委員会	2	1	1
5	大平村教育委員会	5	1	1
6	鞍手町教育委員会	10	1	1
7	稲築町教育委員会	5	1	1
8	筑紫野市教育委員会	10	1	1
9	大平村教育委員会	1	1	1
10	個人	1	1	1
11	吉井町教育委員会	1	1	1
12	吉井町教育委員会	1	1	1
13	久留米市教育委員会	1	1	1

## 主要文献目録

- 装飾古墳の世界 国立歴史民俗博物館一九九三  
装飾古墳が語るもの 国立歴史民俗博物館編 吉川弘文館  
装飾古墳 よみがえる古代・装飾古墳の世界 熊本県立装飾古墳館  
森 貞次郎 「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」 美術研究第二百九十四号 昭和二十二年九月  
森 貞次郎 「竹原古墳」 美術文化シリーズ  
森 貞次郎 「装飾古墳」 教育社  
森 貞次郎 「北部九州の古代文化」 明文社  
玉利 煎 「装飾古墳」 平凡社  
石山 煎 「地域の古墳 I 西日本 北部 (福岡県)」「古墳時代の研究」 雄山閣  
小林行雄編 「装飾古墳」 平凡社  
肥後に於ける装飾のある古墳及び横穴 京都帝國大学文学部考古学研究報告第一冊  
九州に於ける装飾ある古墳 附錄 佐生式土器形式分類図録 京都帝國大学文学部考古学研究報告第三冊  
乙益重隆編 「装飾古墳の文様」 古墳時代 III 古代史発掘八 講談社  
小田富士雄 「古墳壁画の流行」 國説発掘が語る日本史 六九州・沖縄編  
新人物往来社  
佐藤正義 「第一章原始時代の夜須地方」 「夜須町史」 夜須町市史編纂委員会 平成二年  
福岡県立朝倉高等学校史学部 「埋もれた朝倉文化」 昭和四十四年  
財團法人有馬記念館保存会 「矢野幸太一貞翁」 昭和六十二年五月  
岩戸山歴史資料館 「岩戸山歴史資料館 展示図録」 一九八八  
大牟田市教育委員会 「人牟田市の文化財」 昭和六十一年  
中間市立歴史民俗資料館 「中間市内の横穴墓展」 開館五周年特別展図録  
一九九〇;十一 渡辺正氣著 「日本の古代遺跡」 三十四 福岡県 保育社  
吉井町教育委員会 「若宮古墳群I」 吉井町文化財調査報告書第四集  
一九八九 北九州市教育委員会 「相坂横穴群」 北九州市文化財調査報告書第六十九集  
吉井町教育委員会 「若宮古墳群II」 吉井町文化財調査報告書第六集  
一九九〇 玄洋開発株式会社 「黒部古墳群」 一九七九  
大平村教育委員会 「穴ヶ葉山古墳群」 大平村文化財調査報告書第二集  
一九八五 「寺地古墳のしおり」 田主丸町教育委員会  
福岡市教育委員会 「東光寺剣塚古墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第二百六十七集  
一九九一 「城腰遺跡」 穀田町文化財調査報告書第三集 一九九一  
穀田町教育委員会  
六 一九九二 「朝田古墳群概報」 浮羽町文化財調査報告書第十集  
浮羽町教育委員会  
一九九三 「古墳横穴」 敦手町誌上巻  
田主丸町教育委員会 「西館古墳」 田主丸町文化財調査報告書第六集  
一九九六  
大牟田市教育委員会 「倉水茶臼塚」 大牟田市文化財調査報告書第十五集  
集 一九八一  
田主丸町教育委員会 「田主丸古墳群」 田主丸町文化財調査報告書第一集  
一九八四  
広川町教育委員会 「弘化谷古墳」 発掘調査及び保存整備報告書  
川町文化財調査報告書 第八集 一九九一  
福岡市教育委員会 「重要遺跡確認調査報告書I 装飾古墳 吉武七章塚」  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 一九八一  
若宮町教育委員会 「竹原古墳」 竹原古墳保存修理事業概要報告 若宮町文化財調査報告書第四集  
一九八二  
飯塚市教育委員会 「川島古墳」 飯塚市文化財調査報告書第十四集 一九九一

## 協力機関及び原稿執筆者・協力者一覧（順不同）

国立歴史民俗博物館 福岡県教育委員会 九州歴史資料館  
九州大学大学院 福岡市教育委員会 福岡市立博物館  
九州大学文学部考古学研究室 北九州市立考古博物館  
八女市教育委員会 大牟田市教育委員会  
大牟田市歴史資料館 若宮町教育委員会  
穎田町教育委員会 鞍手町教育委員会 鞍手町立歴史民俗資料館  
桂川町立王塚装飾古墳館 中間市教育委員会  
直方市教育委員会 久留米市教育委員会  
篠山神社 日本歴史資料館 浮羽町教育委員会  
吉井町教育委員会 田主丸町教育委員会  
稲築町教育委員会 夜須町教育委員会  
広川町教育委員会 広川町立古墳公園資料館  
筑紫野市教育委員会 飯塚市教育委員会  
豊前市教育委員会 大平村教育委員会  
新吉富村教育委員会 北九州市教育委員会 朝倉町教育委員会  
那珂川町教育委員会 アサヒビル工場株式会社博多営業所  
福岡県立小倉高等学校 福岡県立福島高等学校  
福岡市埋蔵文化財センター 稲築町教育委員会

### 執筆者

小田富士雄（福岡大学文学部教授）

石山勲（福岡県総務部国立博物館対策室長補佐）

小方良臣（若宮町教育委員会文化財係長）

長谷川清之（桂川町立王塚装飾古墳館学芸員）

### 協力者（順不同）

石丸洋 日下栄 吉留秀敏 伊藤秀一 尾園晃

福澤義信 添田文彰 上野智祐 吉田迪夫 山田元樹

末崎博之 野田孝一 尾崎源太郎 赤崎敏男 丸林楨彦

田中良之 溝口孝司 小河誠嗣 平川祐介 堤諭吉

立石雅文 野上善右 須原綠 伊崎俊秋 富安徹

古賀正美 入澤朝一 米田靖史 柳田康雄 常松幹雄

松永幸男 奥村俊之 山田茂人 田村悟 古後憲浩

舌間悟 佐藤正義 栗焼憲兒 末永浩一 矢野和昭

櫻井康治 溝口孝司 白石泰利 栗山伸司 澤田康夫

寺嶋克史 夜須町文化財整理室のみなさん

### あとがき

九州地方で多く見られる装飾古墳は、五世紀中頃に作られはじめ、六世紀に入って大きな広がりを見せてています。今回紹介した福岡県地方では石人山古墳に始まり、竹原古墳で終わりを告げています。この間に、全国的にもまれな特徴を持つ装飾古墳がこの地方で多く作られたことは紛れもない事実です。

装飾文様に見られる文様は、その多くが熊本県と類似性を持つものであり、大陸文化流入後もそれまでの手法・文様を捨てずに併用させているところがいかにも日本のと思われるところです。

これら装飾古墳に葬られた首長達は壁一面に描かれた文様に「呪術・辟邪」を求めて死後の世界を安らかにと願っていたに違いありません。

この開館五周年特別企画展の開催にあたり、関係資料の借用や調査について格別のご配慮とご協力を頂きました、関係機関並びに関係各位に深く感謝申しあげます。

なかでも、福岡県の装飾古墳写真の大部分を提供していただいた九州歴史資料館の石丸洋氏、図録に玉稿を頂きました福岡大学文学部教授小田富士雄氏をはじめ、福岡県総務部国立博物館対策室長補佐石山勲氏、若宮町教育委員会 小方良臣氏、桂川町立王塚装飾古墳館長谷川清之氏には、この場を借りて心よりお礼を述べさせていただきます。

最後になりましたが、当企画展の基礎調査を行われた、最上敏氏（現鹿北町立広見小学校教諭）に感謝申しあげます。

（長谷部善一）

平成九年度  
開館五周年特別企画（全国の装飾古墳シリーズ三）

### 『福岡県の装飾古墳』

印 発  
編 集  
発 行 日  
一九九七年十一月一日

熊本県立装飾古墳館  
〒869-0549 熊本県鹿本郡鹿央町岩原三〇八五番地  
電話：〇九六八一三六一二一五  
FAX：〇九六八一三六一二一〇  
熊本県文化財保護協会

印 発  
刷 行  
白木印刷株式会社

09 教委 熊古  
⑥ 001

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第9集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：福岡県の装飾古墳

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日